ゴール（Galle）スリランカ一地方商業都市の肖像（イメージ）(二)

――都市誌の試み――

友杉孝

一、ゴールまで　第百四冊
　間奏曲
二、街のかたち　第百四冊
三、さまざまな商い　本号
四、商人の系譜　本号
五、日常生活
六、祭りと商人
七、祭りの後で
八、ゴールから
　ノスタルジア再考
　あるいは
　ナショナリズムの空洞化をめぐって

三、さまざまな商い

さまざまな商業活動が歴史的に重層して都市ゴールをつくり、商業の発展は都市の拡大でもあった。このような都市形成の営力（エージェント）として作用した商業活動について記述しておこう。ゴールでの多様な商業活動の地域分化は、おおまかにみて、さきの都市景観の地域分化と重なり合うから、商業活動の記述も都市景観による地域区分に従って進めたい。まずフォートに立地する戦前からの外国名を冠した商業活動である。これらの活動はフォートに集中する。都市景観と同様に、フォートの商業活動はゴールの他地域とは異なって、際立って独自な様相を示す。ウォーカー・アンド・サンズは、戦前、茶プランテーションで使う各種機械類を供給するイギリス人所有の会社であった。(16) 一八五四年、当時のコーヒー・プランテーション発展の動きの中で、スコットランド出身のジョン・ウォーカーがプランテーション農機具の会社をキャンディに設立した。以後、本社はコロンボで、茶プランテーションが広く分布する各地に支社をもった。ゴール支社は一九一一年である。独立後、会社は完全に現地化し、現在はインド・タタ系の所有である。しかし会社名は変らず、そのまま使われる。長年培ってきた会社名に対する信用を考慮するからである。ゴール支社はスリランカ南部一帯の茶プランテーションの機械類供給と修理を行なう。自動車の修理もあわせて行ない、さらにテレビ、電気冷蔵庫などの輸入代理店でもある。従業員は、事務系二五人、機械工六〇―七〇名、臨時雇い二〇―二五名である。これら従業員を使って、業務を運営する役員は三名で、すべてコロンボ本社から派遣される。一時的なゴール勤務である。ウォーカー・アンド・サンズに対抗する会社にセイロン・エンジニアリング・

コーポレーション（Ceylon Engineering Corporation）がある。一九四九年、パキスタンから移住してきたムスリムが一九五四年に設立した。茶とゴム・プランテーション、精米所などの機械類を製作・修理する。会社は東部商店街のはずれに位置する。従業員数約二五〇名で、ゴール有数の企業である。しかしムスリムの製造業はまったく例外的で、一般には、ゴールのムスリムはもっぱら商業分野でのみ活躍する。

チャールス・ヘイリー（Charles Hayley）もフォート、ペドラー・ストリートに立地する。一八七八年まずゴールで創立され、南部諸地域の特産品であるシナモン、シトロネラ、椰子繊維を加工、製品化した。椰子の繊維はきわめて強靱で、ロープ、マット、タワシを作るにすぐれた材質であるという。戦後、イギリス人からシンハラ人所有に完全に変ったが、会社名は以前と同じである。現在は椰子繊維からの製品に特化している。工場は事務所裏手にあるが、東部商店街のはずれにも、もう一つの工場が立地する。従業員二五五名で、役員はコロンボ本社から派遣される。現役員はペラデニア大学出身の秀才で、フォートのメンバー制のテニスクラブで休暇を楽しむ。ゴール着任当時はいかにも活気のない眠ったような土地に来たと感じたそうであるが、現在はむしろ親しみを覚えている。しかし顔は常にコロンボ本社に向いていて、本社役員への昇進が希望である。従業員はゴール在住で、毎朝、さきにみた新あるいは旧ゲートをくぐってフォートに出勤してくる。チャールズ・ヘイリーに類似した、ムスリムの個人企業もある。東部商店街に離れて立地し、規模はずっと小さい。従業員二〇―三〇名ていどである。企業主は工業家というより、むしろ商人的である。彼の事務机には電話が一つあり、常にコロンボの相場に敏感である。仲買人から椰子を購入してコプラをつくる。関連企業で椰子繊維からロープとマットレスをつくる。もう一つの関連企業では椰子油をつくる。どの家庭でもカレーには椰子油が不可欠で、食料品店で購入する。これら企業はいずれも東部商店街の東に所在する。

クラーク・アンド・アトキンス（Clark and Aitkins）は、現在、ウォーカー・アンド・サンズの斜め向いに位置するクラン・ハウス（Clan House）内に事務所を構える。一八七一年、シティ・オブ・グラスゴー銀行の破産によりセイロンに生計を求めて来たブリトン・アトキンズが創立した。以前、さきにみたウォーカー・アンド・サンズの建物を所有して、輸出入業務・保険業で活躍した。ロイドのセイロン代理店でもあった。フォート城壁に隣接する旧埠頭から茶、ゴム、コプラなどを輸出し、米穀を輸入していた。しかし戦後、輸出入ともに激減した。くわえて、一九六一年港湾業務は国有化し、荷役業務のほとんどが国家の仕事に移転した。したがって、現在、会社の仕事はごくわずかしかない。しかし、ロイドとの提携によって、保険業分野の拡大に努める。クラーク・アンド・アトキンスに対抗する企業もあり、同じく輸出入業務、保険に関わる。大規模な茶プランテーションの経営、ゴムの出荷なども行なう、ゴールの代表的企業である。茶プランテーションを主体とする大土地所有に基盤を置く。会社建物は東部商店街のはずれに立地する。この企業の所有者はカラバ・カースト出身といわれるが、障害児童の施設、癌センター、伝統生薬研究所、学校建物の寄附など、多額の資金を社会事業に用いている。

フォートの外国名企業についてみたが、彼等の活動の変遷は、時代変化の一局面でもある。外国名企業はすべてイギリス人所有からシンハラ人所有になった。しかも強力なシンハラ対抗企業もフォート外部に形成され、かつてのような独占に近い営業ではない。対抗企業はすべて東部商店街の東はずれに位置する。ゴール市街の東への拡大である。対抗企業の形成にともなって、ゴールでのフォートの卓絶した地位も相対的に低下した。オランダ、ついでイギリス植民地都市のスリランカ化であり、フォートの土着化である。突出した土地フォートのゴール全体への統合が強化された。しかし、この土着化過程にもかかわらず、興味あることは、ゴールとゴール外部とを結ぶフォートの変らぬ役

割である。オランダ人、イギリス人に代って、現在はコロンボから支配人が派遣されてくる。ゴール自身が決めることではない。任期が終われば別の人がやってくる。すなわち、ゴールは海外交易の残照を現在に引き継いでゴールの外部を内部に取り入れる。商業取引きも外国企業の伝統を継承して、非人格的で、制度化されている。商業活動は形式的合理性のもとで行なわれているのである。後でみる週市の商業活動が商人自らの生活維持を目指すこととはまったく相違する。しかしゴールの外部はかってのように海外ではなく、直接的にはコロンボである。このようなゴールにとっての外部性の変遷は、ゴールがコロンボに従属する一地方都市となってゆく過程でもあった。

商業と並んで、フォートの主要な活動分野である行政、司法も外国企業と同様で、地方長官も裁判官もコロンボで任命される。彼等の活動もまた形式的合理性に従って遂行される。フォートがいわばゴールの垂直的統合の中心であることは変らないのである。ゴールをゴール外部に結びつける対外交易は、社会の垂直的統合の不可欠の一局面であり、行政、司法と不可分の関係を構成していた。かつて海外交易がもたらした財貨は異文化であり、現地社会を超越する価値を象徴した。支配階層は財貨を所有し、財貨は社会秩序の正当化を具体的な「もの」で示した。

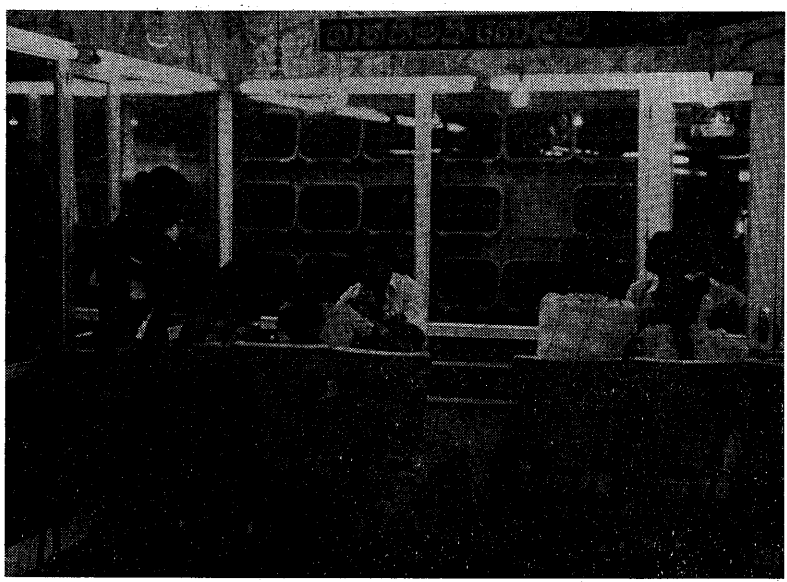
しかし現在、事情は大幅に変化しつつある。ゴール商店街の発達である。ゴール商店街は直接的にコロンボと取引きし、フォートを経由しない。近代工業製品が拡く一般化し、主要な商品となったからである。したがって、商業におけるフォートの比重は低下した。同様に社会の垂直的統合の中心としての比重も弱まった。コロンボを中心とする直接的な影響力が圧倒的になったのである。商業の比重低下は行政、司法だけでなく、文化にも深く関与している。コロンボからの流行がたちまち拡がり、ゴール自身が地方文化を形成する力も弱まった。一つの社会において外部性を帯びる場を都市性とする定義に従えば、明らかにゴールの都市性は弱まった。いわば、都市性を強く持つ第一次的

都市から第二次的都市への移行である。第二次的都市は、第一次的都市からの影響を自らの後背農村に伝達する。したがって、第一次的都市にたいしては第二次的都市は地方（農村）であるが、後背農村に対しては都市であり続ける。

フォートの商業活動には、ほかに多数のムスリム宝石商人がいる。ムスリム・コミュニティーでは、宝石商人は衣料商人、金物商人よりも高い社会的威信を享受する。彼等は親族の結びつきが強く、商業活動でも親族が大きな役割を果たす。ムスリム宝石商人は店舗をフォートにもたず、むしろコロンボに進出している。二、三の事例をあげてみよう。コロンボ・ジュエルリー（Colombo Jewelry）は、コロンボの目抜き通りゴールフェイス（Galle Face）に面する立派な高層ビルの一階に店舗を構える。一九二二年、コロンボに進出した。外国人相手に洗練された商いを営む。外国にも進出している。店舗を構えないで外国人バイヤーに直接売り込む商人も多い。彼等のフォートの家屋はいわば留守宅で、活躍の場はゴール外部である。ゴールのメイン・ストリートに店舗を構える事例もごく少ない。これら宝石商人の活動は手広く、さきにみた西部商店街の宝石商などは、零細であるとさえ彼等はいう。メイン・ストリートで商業活動する多くのムスリム商人は、フォート以外の住宅地、たとえばタラピイティヤ（Talapitiya）に居住して、店舗との間を通う。フォートに居住するムスリム商人のもう一つ事例、モハメッド・ハッジャ（Mohamed Ha- djia）会社の所有者の一人は、スリランカのイラン、パキスタン大使を歴任し、海外に多くの知己をもつ。商業面でも海外と提携し、たとえば日本のナショナルのバッテリー代理店である。ライトハウス・ストリートの自宅斜め向いのオランダ風古い建物をゲスト・ハウス（Guest House）にし、若い外国人観光客の安価な宿泊所とする。国内的にも手広く商いを拡げる。ゴールでただ一人、タバコ卸売りライセンスを一八八九年よりもつ。宝石、衣料品から鶏卵にまで手を広げる。儲かりそうなら何でも手をつける感じであるが、しかし製造業には進出しようとしない。メイン・ストリ

ートにファンシー・ショップを構える若いムスリムの場合、この店は彼の伯父の所有であるが、老齢の伯父に代ってすべて店の経営を行ない、いずれ相続が予定されている。父親はフォートのニュー・オリエンタル・ホテルに宝石店シージェム（Cey Gem）をだしている。父親を手伝って、外国人への宝石の売り込みも熱心である。住居はフォートにあって、母親と共に住むが、しかし、いつもコロンボとの間を商売で往来する。コロンボにも住居があり、最高級住宅地コルピティアである。彼の祖父は、戦前、神戸で宝石の商売をしていたという。このようなムスリム商人の活躍は興味深い。フォートのムスリム商人は、ゴールに寄港する外国人に宝石など土産物を販売したが、ペトラー・ストリートの名称が示すように輸入衣料の行商もした。ムスリム商人は、植民地勢力と現地社会の媒介者であった。植民地時代の商業経験を基礎に、現在、広く特定商品の国内販売網を実現し、とくに宝石業ではほとんど独占的である。ムスリムの商業活動は、結果としてフォートの土着過程を促進し、その広汎な商業網の形成によってフォート中心の社会の垂直的統合を補完した。この商業活動は、ムスリム商人が植民地時代より一層ゴール社会内の存在になった過程でもある。しかしムスリム商人が遠隔地を媒介することには変りはない。市場経済の影響をゴール社会に伝え、あるいはスリランカを国外に媒介する。ムスリムの商業活動は外国名企業の活動と歴史的に一体化して、ゴールを外部と結びつけてきた。いわばムスリム商人はゴール内部の存在であると同時に、ゴール外部をも強く指示してきた。このことはフォートがゴール内部に位置しながら一つの異郷であったことに対応するであろう。すなわちゴールを活性化し、都市を形成させ、あるいは秩序づけた力は外部から異郷フォートを経由してもたらされたのである。

ついでメイン・ストリート商店街の商業活動についてみよう。まず西部商店街である。さきにみたように、ここは宝石、金細工装身具の店が軒を連ねる。宝石商人の進出は近年の観光客の増加によるが、金細工装身具商の活動はず



キッタンギ貴金属装身具店にて。外からの光が射し込まない店内は，人工の電灯の光だけで映しだされる一つの世界をつくる。商人の話しは何か権威を帯び，人々は真剣に聞き入る。若い人が多い。

っと古い。戦前、チェティアが金細工装身具と金融を独占的に扱っていた。ムスリム商人と同じく、しかし異なる分野での植民地経済の媒介者であった。一九三〇年代、チェティアはキッタンギを残してインドに帰国し、スリランカ北部のタミル人に替わる。タミル金細工装身具商の一つの大きな特徴は、庶民金融も同時に行なうことである。客はネックレス、腕輪など金細工装身具を持参し、この品物の時価の1／2ないし1／3の借金をその場でする。当然、持参の金細工装身具の純度は確かめられる。金細工装身具にほんのわずか、やすりできずをつけ、塩酸で泡のでかたをみるだけで充分という。大変簡単な方法である。何軒かの店では、金メッキの商売も兼業で行なっている。この庶民金融は銀行、政府機関に比較して、きわめて簡単な時間をとらない金融の手続である。金細工装身具は質物で、返却が不可能な場合、売却

される。利子率は月七%が相場のようで、相当な高利である。返済は一年以内と規定されるが、さらに一年間の猶予があって、質物の売却事例は少ない。客の大半は中・下級官吏、漁民、労働者など中・下層階級の人々である。市場経済が急激に一般化する過程で、貨幣に対する需要は非常に大きい。現金がなければ生計は成り立たない。どこにも出かけられない。新来の商品の魅力も大きく、人々の購買欲を強く刺激している。したがって、これらの人々にとって、タミル金細工装身具商は搾取者であると同時に、救済者でもある。社会の経済的危機が深刻化すれば、タミル金細工装身具商は少数民族であることとあいまって、シンハラ社会のルサンチマンの対象になり易い。一九八三年暴動の危機的状況についてはすでにみた。タミル人は汚く金を稼ぎ、しかもシンハラ人を犠牲にして貯め込んだ財産を北部スリランカに送ってしまう、と多くのシンハラ人は考えている。社会悪のレッテルが貼られている。街の景観上もキッタンギは刑務所の向う側に位置する。キッタンギの向う側には国立ゴール病院が、さらに向うにはダラーダの広大な共同墓地が位置する。しかし、近年、西部商店街では、これまでと異なる新しい動きも見られる。シンハラ金細工装身具商の進出である。伝統的な金細工装身具職人の一部が商人化して、金細工装身具店も兼ねるようになり、庶民金融の分野にも進出しつつある。フォートとは異なるが、一つのシンハラ化の展開である。

西部商店街の主要商品である金細工装身具は大変興味深い。いうまでもなく、金細工装身具は人間の生物的生存にはまったく関与しないし、物理的な生活の快適さにも寄与しない。しかし生物的生存にまったく関与しないからこそ、金細工装身具は伝統的に社会的力を表示する好都合なものでありえたのである。金細工装身具の稀少性は社会的力の非平等的な配置の結果である。富裕な人はいくつもの金細工装身具を身につけるが、貧困な人は必要な際、たとえば結婚式に臨んで、他人から借りる。社会を捨てた出家、すなわち僧侶は絶対的に金細工装身具を所有しない。しかし

現世利益を希求する人々は仏陀像を金色にする。結婚式では金細工装身具は不可欠であるが、葬式には絶対に禁止されている。さきにみたキッタンギが閉ざされた洞窟に似た独特な雰囲気に充たされていたことも、このような金細工装身具の特別な社会的意味づけによるのであろう。まさに金細工装身具は、人々の間を秩序づける社会的差異の体系を具体的なもので表示する商品の系譜の原型である。したがって、金細工装身具は常に人々のどぎついまなざしの的であり、ルサンチマンの対象でもある。

さらに興味深いことは、金細工装身具の担い手、すなわち金細工装身具商についてである。これまでみてきたように、圧倒的に異民族タミル商人である。金細工装身具商がタミル人であることはゴールに限らない。コロンボで金細工装身具店が集中するシー・ストリートを始めとして、スリランカの多くの地域でみられる。社会的力を表示するものが社会の外部からもたらされるのであって、けして社会の内部からではない。このことはさきのフォートがゴールで占める位置に相似する。すなわち、ゴールを統合し、秩序づける力はゴールの外部に空間的にも社会的にも位置したフォートに由来した。しかしこの社会を統合し秩序づける過程で、フォートはゴールに内部化した。同様に外来のキッタンギのタミル商人もゴールに定住している。政治権力と金細工装身具は相似の運動過程を示す。政治権力を危機に陥れる社会情況にあっては、金細工装身具店あるいはタミル商人はいつもスケープゴートの対象とされる構造が潜在的にあるのである。

中部商店街は近代工業製品で特徴づけられるが、さきの金細工装身具とは異なって、基本的には、日常生活における実用品である。しかし、商品別にみれば、近代工業製品もさまざまのていどで装飾性をあわせもち、一定の社会的意味が与えられる。注意すべきは、商品の装飾性はたんなる個人の好みである以上に社会的な強制力をもち、特定の

メイン・ストリート中部商店街にて。午前10時前であるが，相当な人通りである。多くは後背農村からバスで街に来た人々である。農村に対しては，ここは晴れの舞台に相当する。店の看板をずっと眺めてゆくだけでも楽しい。

儀礼的場あるいは社会的地位を象徴する機能をもつ。したがって、人々は実用的見地からだけで近代工業製品を求めるのではけしてない。二、三の店に立ち寄ってみよう。

電気器具の店では、テレビ、ラジオ、掃除機、ミキサー、扇風機、冷蔵庫、アイロン、時計まである。これらはまさに時代の花形商品である。定価の五パーセント値引き、月賦販売が普通である。しかし、コロンボに所在する免税店が大きな問題であるという。ゴールでも、多くの人が何かの方法で免税店で輸入商品を安く購入するからである。その分だけ店の売り上げは減ることになる。店舗の二階に修理部を設けている店もある。電気製品は便利さで評価されると同時に、時代の象徴としても受け取られる。時代とともにあるという感覚でナウイのである。とりわけ、テレビには異常なほどの関心が集中する。社会的身分の象徴にすら

なっている。カラー・テレビの所有者は上層階級である。白黒テレビは中層階級に普及しはじめた。テレビのない家庭では子供達にせがまれる。したがって、テレビのないことが貧困感を増巾させることにもなる。ラジオ・カセットは若者たちの好みである。スリランカの歌謡を入れたカセット・テープが沢山売りだされている。

衣料品は高級品を主体にする店、大衆品の店、男性の洋服生地店など、客の収入と好みで様々である。国産と外国産生地では、外国産が断然に評判よい。男性の洋服生地店は仕立も行なう。しかし、衣料品は女性がより熱心に生地を選び、流行に合わせてデザインするようである。若い女性は気に入った生地を出してもらい、価格を確かめながら、真剣に品物にみいる。サリーの生地、色彩も沢山あり、選択の巾は大きい。買い物の楽しみであろう。年間を通じて相当の客はあるが、とくに四月の祭りはもっとも忙しい。いつもの日は普段着であっても、祭りは晴れの場である。無理しても素敵な衣装を用意する。衣装は実用的であるが、それ以上に装飾品として好まれる。好みは個人的であると同時に社会的でもある。結局、各人が自らの趣味で好きな衣装をととのえても、各人の衣装はそれぞれの社会的身分をあるていど表示する。シルク・ジョーゼットとナイロンの間の社会的距離は大きい。多くの客は購入する店をおおよそ決めている。上層階級の人はよくコロンボで買物をする。自動車でコロンボとの間を往来する機会が多いほかに、品質、デザインの選択の巾がずっと広いという。中層階級の人々はメイン・ストリートの店である。男性の洋服についても、ほぼ似た事情である。仕立屋を兼ねる洋服生地店は、顧客の厚いノートを用意していて、客の体型の精密な寸法を記入している。たとえ客が店にこられなくても、このノートさえあれば、容易に注文の品物を届けることができる。ノートは上層あるいは中層階級のリストにそのまま転用できるであろう。一見、客の出入りがないようにみえても、店主は何人もの縫い子を使って、いつも忙しく仕事をしている。

衣料品に比較して、近代医薬品には装飾性は少ない。ビタミンなどありふれた薬品以外は、医師の処方箋を薬屋に持参して購入する。午前中、薬屋は処方箋を持つ客で溢れることがある。客との取引きはまったく定価販売で、かけ売りもない。あいまいさがどこにもない。非人格的取引きである。棚の化粧品類も同じで、定価通りである。一物一価の原則がよく実現される。しかし興味あることに、一物一価の原則には変らないが、輸入品と国産品はまったく異なる物価レベルにある。医薬品ではないが、かん入りインスタント・コーヒーの場合、薬屋の片隅にあるネスカフェは五〇グラムで五〇ルピー、国産は一〇〇グラム、一三ルピーにすぎない。明らかに、二つの物価レベルの相違は購入者の社会的差異の表示として機能するであろう。ブランドを味うのである。

輸入品と国産品の間の差異作用は靴においてもいちじるしい。台湾からの輸入品が好まれ、たとえば運動靴三五〇ルピーに対して、コロンボ生産の靴は一五〇ルピーでしかない。靴の販売は非常に近代的で、店は定価の二〇%を受けとるだけである。会社の係員が毎週巡回してきて、不足している品物は補充される。一種の委託販売といってよい。商業が、近代工業製品の場合、生産会社の一部門でしかなくなる一例であろう。しかし商人と客との間には馴染みが生れることもあり、客に熱心に品物をすすめる。靴製造会社は形式合理的に非人格的に商業を扱うが、商人は自らの生計を立てることが出来るように励む。

近代工業製品を商う商人については、ごくおおまかにいって、シンハラ商人はすべての商品の販売に関わるが、ムスリム商人は衣料品、ファンシー・ショップ、金物など、いくつかの業種に目立つ。しかし、仕立屋にはムスリム商人は一人もいない。仕立屋に雇われる場合でも、セールスマンとしてである。タミル人はほとんど登場せず、わずか例外的に靴屋があるだけである。衣料品、ファンシー・ショップは大変装飾性が強い。ムスリム商人の販売上手には

定評がある。口が滑らかで、愛想がよい。シンハラ商人は無口で、無愛想である。こんなことがいわれている。ムスリム商人は客に品物を示し、どうぞ家に持って帰り、よく見て下さいという。気に入らなければ、どうぞいつでも遠慮なく返して下さればよい、とつけくわえる。他方、シンハラ商人は全然異なる。客に対して品物を売ってあげる、という態度である。近代医薬品の店舗はすべてシンハラ人であった。まったくの定価販売の業種であり、客は医者の処方箋を持って向こうからやってくる。

中部商店街で商われる近代工業製品が、実用性とともに装飾性をもあわせもつことをみた。むしろ近代工業製品のまたたくまの普及は、その装飾性によるところが大きい。装飾性にもとずく社会的差異作用の機能である。当初、いうまでもなく、近代工業製品は生活必需品ではけしてなかったはずである。今でもテレビは生活必需品ではない。しかし近代工業製品の装飾性が人気を集め、普及してしまえば、生活必需品になっていく。靴、医薬品、機械製衣類、時計など事例は数多い。人間の生物的生存が生活必需品を決めるのではなく、社会的生存が決めるのである。近い将来に、テレビも生活必需品になるかもしれない。このような近代工業製品の急激な普及は、当然に、人々の生活のありかた、人と人との間柄をも変えてしまう。商品はぽつんと他から切り放されてあるのではなく、常に人々にその商品にふさわしい生活をするように導くからである。このため近代工業製品は社会変化、すなわち社会の市場経済化を導いていく。このような近代工業製品が社会の市場経済化を先導する機能は、さきにみた金細工装身具が伝統社会で果たした機能とはまったく別の次元にある。いわばゴールでは近代工業製品は現代社会を先導する商品である。したがって、現在、ゴール商店街の中核となる地域も中部商店街にほかならない。これまでの金細工装身具を原点として構成される商品世界に、現在の近代工業製品がつくる商品世界が重なり、いわば習合している。しかし近代工業製品

メインストリート東部商店街にて。コロンボからのトラックと農村の雑貨屋に向う牛車で道路も狭くなる。ほこりも相当にただよう中を，人々が行き往きする。日射しも強烈で，クーリーの黒い背中が光る。

で形成される上層部はいまだ薄いため、市場経済化がもたらす災悪は、この薄い上層部の割れ目を通して、金細工装身具と容易に結びつけられやすい。しかし社会の市場経済化は不可避的にいやおうなく進む。社会を定かでない方向にいやおうなしに先導しつつある近代工業製品がつくる世界を見せつけるかのように、フィリップス、バータなど外国名商品の看板が乱雑に宙に浮かび、外国製バスが人々を満杯にして街を通り抜けていく。中部商店街が盛況になるだけ、さきにみたフォートの社会的統合力は弱まる。中部商店街はフォートを経由することなく、直接にコロンボと結びつき、社会をひたすら市場経済化していく。

東部商店街では乾物商が忙しく取引きする。卸売りと並んで小売りをも営むから、店内は人と物でごたごたと乱雑に混みあい、活気が生まれる。コロンボ・ペタ（Pettah）から大量の商品を常に

仕入れる。コロンボ常駐の店員からいつも電話で市況報告が入る。店主は机上の電話を取りながら購入すべき品物を決断し、指示する。輸送専門の業者がトラックで品物をペタから店頭まで運ぶ。何人もの上半身裸のクーリーが品物を店の奥の倉庫に運び入れる。これら取引きはすべてその場で現金決済され、信用取引きはない。銀行の信用供与は利用可能であるが、実際にはあまり利用されないようである。他方、卸売り相手の農村雑貨屋、特定の顧客に対しては、一ケ月の信用を無利子で与えることがある。同業者との競争に負けないためである。しかし値引きはない。毎回の取引き明細がノートに控えられる。ノートにある馴染みの客が相当数あって、商売はやっと安定する。しかしまだ宅配はない。毎回、客は店にまで出向かねばならない。雑貨屋商は牛車で品物を農村まで運ぶ。卸売りと並んで、店内での小売りもあるが、これら小売りはすべて現金で、値引きもしない。卸売り相手に対するような馴染みの感じもなく、無愛想といってもよい対し方である。これら乾物商ではタミル人が目立つ。どのタミル商店も大変な人込みで、つぎつぎと客をこなす。現在と異なって、戦前は米穀の大部分をインドから輸入していた。各種カレー材料は現在もインドから多く輸入する。干魚はモルディブのほかに、北部タミル地域から多く移入する。したがって、タミル人が乾物商の分野で大きな勢力を持ったのも当然であろう。植民地経済下で増加する人口に対して、不足する米穀その他商品をタミル商人はもたらした。タミル乾物商は、ムスリム商人とは異なる分野で、植民地支配の海外交易を補完して、シンハラ社会をその外部に結びつける媒介者であった。ところが、近年、民族問題の激化はタミル乾物商の地位をいちじるしく不安にした。戦前からシンハラ乾物商も活躍はしていた。しかし現在、スリランカ北部に帰るタミル人にかわって、シンハラ乾物商の比重は高まりつつある。タミル乾物商の活躍は目立って大きいが、この分野でもシンハラ化は進みつつある。

東部商店街は乾物商で代表されるが、ほかにもいくつかの興味ある商業がある。たとえば伝統生薬。近代医薬品の店舗が中部商店街にのみ立地するのに対して、伝統生薬は東部商店街にのみ所在する。しかし両者ともシンハラ人だけの商業であることでは共通である。樹皮、木根などが何十種類も並べられ、かたわらに小さな秤が置かれる。いくつもの店舗が旧バス・ターミナルを中心に立地しているから、相当数の客があるに相違ないが、実際に店で客の姿を見かけることは少ない。店の構えも目立たず、内部の照明も暗い。近代医学のクリニックは目につく看板を掲げるが、伝統医療の医師の所在は、土地の人に訪ねなければ、まったくわからない。衰退した伝統医療がうかがえる。

東部商店街で扱う乾物、すなわち米、カレー材料、干魚、椰子油はまさに主食で、生活必需品である。これまでみてきた金細工装身具、近代工業製品とは大きく異なる。乾物には装飾性はきわめて乏しく、まったくの実用商品である。主食であることは社会的差異を表示しえないことであり、乾物は社会的威信財としては機能し難い。しかし乾物店をよく見ていると、多様な価格表示に気付く。米である。多様な品種に対するそれぞれの価格がある。たとえばサンバ米はキロ当り二〇ルピー以上もするのに、薫蒸米は七ルピーもしない。玄米も安い。いうまでもなく、サンバ米を買う人は決して薫蒸米は買わないし、薫蒸米を買う人もサンバ米を買うことはない。すなわち主食ではあるが、品質・品種により価格差があり、この価格差が社会的差異を示すことに機能する。上層階級の家庭では上等のサンバ米にサフランを入れた美味な炊飯を楽しむが、肉体労働者は消化が悪く腹もちがよい薫蒸米を常食とする。

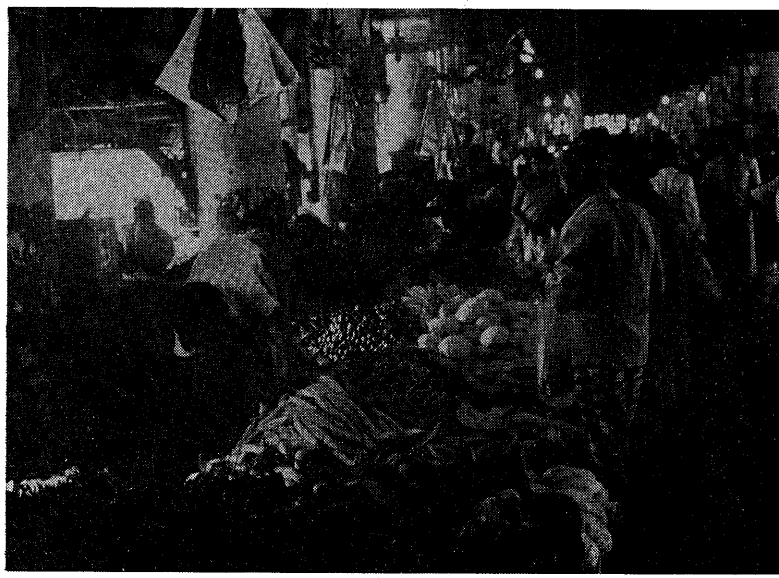
このように主食である乾物も品種・品質により多様な価格差を示し、社会的差異を示す機能をするが、しかし同一の品種・品質の商品はどこでもほぼ同じ価格である。店による価格差はほとんどない。価格はコロンボ・ペタで規定されている。同一品種のなかでの等級米もきちんと規格化されている。一物一価の原則がよく実現し、主食の市場経

済化は徹底している。このことは、人々にとって各自の主食を獲得するためには相応の現金支出をせねばならないことであり、生計を立てるために貨幣が決定的な役割を果たしていることでもある。さきにみた住宅地が農村の延長であり、自然の中に埋れている印象と、このような主食の徹底した市場経済化は奇妙ともいえる対照である。いうまでもなく、この奇妙な対象は、市場経済化がもたらす貧困と不可分に対応し、都市暴動の潜在的な要因を構成する。

公設常設市場での商いは店舗と異なる雰囲気をもつ。どの市場でも各売場区画は、一区画ごとに市役所からライセンスを受けねばならない。毎年、ライセンスは更新されるが、実際はすべて継続である。旧市場についてみてゆこう。親の売場の相続もある。アリカ・ナット（Arica Nut）の商人は親から相続し、子供にも野菜売場のライセンスを収得させた三代続く市場商人である。ライセンス料は一区画（3×6フィート）月四五ルピーで、六ケ月前納する。市場の総区画二三六で、商いを希望する人は多い。ライセンスを第三者に貸す例もある。一区画九〇ルピーが相場である。市場商人の社会的地位は大変低い。しかし、彼等の収入は中・下級役人よりずっとよいと推定されている。各売場区画は売子二、三人を雇い、交代で商う。市場では、ジャフナ・タバコの売場区画一例以外、売子はすべてシンハラ人で、しかもゴイガマ・カースト（Goigama Caste）出身が圧倒的に多い。伝統的職業構成では、ゴイガマは水田耕作者で、社会の最上位を占めた。最大数の人口をも占めていた。野菜の仕入は高地、たとえばバンデルベラ、ヌワラ・エリヤの週市でまとめて購入し、トラック輸送する。先方の業者が定期的に輸送してくることも多い。しかし近年、ゴールの業者がトラックを所有し、高地の、あるいは南部各地の週市で野菜を集荷し、市場の各売場区画の経営者に売り込む事例もみられる。トラック輸送の発達にともなって、輸送業者が野菜のマーケッティングに大きな役割を果たすようになった。[17] 集荷日は月曜、水曜、木曜である。集荷日には早朝四時前から遠距離トラックが到着し始める。売子は

公設旧市場にて。市場の西側，菩提樹の背後は，早期はトラック，ついで牛車が所狭しと連なる。牛車は輸送に大きな役割を果す。石油エネルギーと畜力の共存は現代スリランカ経済の象徴である。

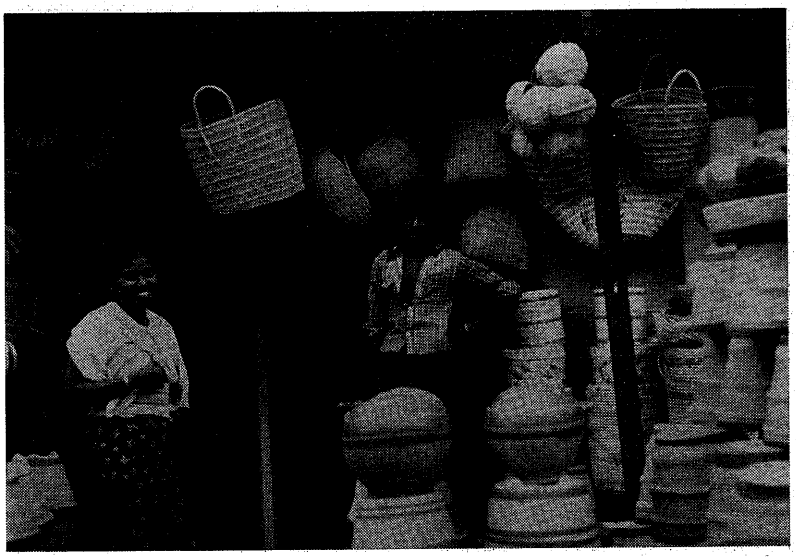
自分の売場で寝泊りしていて、品物を受け取る。六時過ぎまでトラックは断続的にやってくる。客はほとんどいないが、人々は忙しく動き廻る。大きな荷物を背中に乗せて、クーリーが右往左往して働く。一包み運んで一ルピーで、一日に二五ルピーほど稼ぐ。市場わきには到着したトラックが何台も並ぶ。トラックが去った後、牛車がずらりと連なる場所でもある。農村から買出しの小売商である。朝、九時、十時も相当な客で混雑するが、夕方、勤め帰りの人々が買物をすばやくすませてゆく。もっとも混雑する時間である。建物は屋根と柱だけで外壁がなく、開放的である。大勢の売子が通り過ぎる多くの客をてんでばらばらに相手にし、商いする。客は男もいれば女もいる。売子が男だけであるに対して、買手の性別は何の問題もない。男であれ女であれ、時間的に都合のよい人が買物をすませていく。あちこちの売場で、売子が声高に価格を叫ぶなかを人々は往



公設旧市場にて。100年以上も経過した太い列柱に支えられた市場内は買物客で混雑する。高く積まれた生活必需品である野菜の前では，人々の社会的地位も威信もすべて均等化されようとする。老若男女の別も問わない。

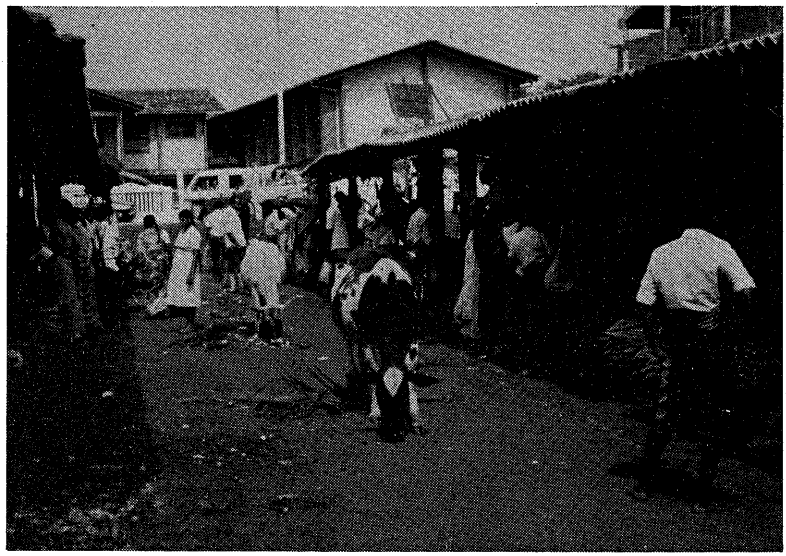
来する。しかし値引き交渉はほとんどない。価格に不満な客はだまって立ち去り、他の売場をのぞきこむ。売子と客が雑談をかわしていることはあまりないが、馴染みの客が出来ることもあり、品物に関するお得な情報を知らせる。

市場が扱う野菜など生鮮食料品はまったく実用的で、装飾性は全然ない。西部商店街の金細工装身具と明確な鋭い対照を構成し、種々雑多な商品で構成される世界の対局をなす。金細工装身具が儀礼の場で不可欠であるのに対して、生鮮食料品は日常性そのものであり、きまりきったことの繰返しである。金細工装身具は、自然の素材に精巧な人間の働きがくわわる。生鮮食料品は自然そのものにずっと近い。庭の一隅でなるバナナは自然であるが、市場のバナナは社会的なバナナであり、商品である。しかし、商品であるバナナも、時の経過とともに腐敗し、自然に還元する。自然そのもののごく近くに位置する



公設旧市場にて。市場のすぐわきに小さな店舗が市場を補完するかのように立地する。この店もその一つ。かご，素焼き土器は生活必需品。とくに素焼き土器は料理に欠かせない。椰子からの砂糖ジャガリーもある。

バナナに対して、金細工装身具は不滅である。その輝く光は永続する力を象徴する。金細工装身具を扱う店舗、キッタンギには、どこか秘密めいた洞窟の感じがつきまとう。一つの神秘的な領域である。客の買物も個別的である。他方、旧市場は建物は開放的で、威勢よく叫ぶ売子に誘われながら、たがいにぶつかりそうになって行きかう客は、通路に沿って山積みにされた野菜をすばやく見比べ、買物をする。この市場の雰囲気は他所にはないもので、市場もまたもう一つの領域、開かれた領域であることを示す。生活必需品に根ざす人々の共同性の実現をおのずから指向する領域である。さらに、金細工装身具がつくる領域は他者との差異を強調する。商いの担い手も相違し、金細工装身具商の大部分はタミル人であるに対し、市場商人は支配カースト・ゴイガマの出身である。すなわち、「近くにいても遠い存在」という印象を与える商人と、まったく身内の商人の違



公設週市（ゴール）にて。散らかる野菜のくずを牛が始末して歩く。のどかである。「牛」が「人間の背丈」に相当するとすれば，週市は人間の身体に見合った景観と言えよう。人々は身体的にリラックスして歩く。

いがある。

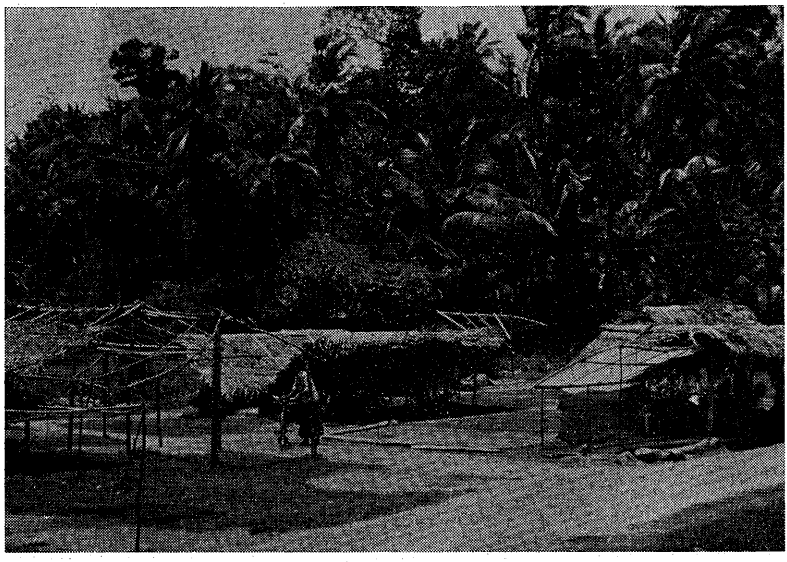
市場の開放性と乱雑さは、旧市場よりも公設週市でよりいちじるしい。[18] 週末の土曜、日曜の午前中、安い野菜、果物を求めて混みあう。人混みの中を、牛がのっそのっそと歩く。売子は、旧市場とは異なり、必ずしも充分に商人として専門化してはいない。女性の売子も相当見られる。週市での女性売子の存在は、雰囲気を明るく陽気にする。屋根付き売場は一日七ルピー、露天は〇、五ルピーの料金を集金に歩く市役所係員にそれぞれ納める。週市の売子の中では、屋根付き売場の売子がより専業商人化している。いつもきまった顔の人がきまった場所で商う。かんかん照りの炎天下、傘で日陰をつくり商う売子は、家の近くの農家から集めた半端の野菜、果物を地面に直接置いて客を待つ。この場限りの売子である。公設週市の売子はすべてシンハラ人だけであるが、出身カーストはさまざまである。近くに住む人々を

誘って、同じバスでやってくる人が多い。明らかに、旧市場に比較して、公設週市は制度化されていない。興味あることに、制度化されていないだけ、公設週市にはざわざわした賑やかな雰囲気がたちこめる。より開放的な空間である。市場の制度化の進展、すなわち週市より常設市への動きは、女性を市での売手より排除する。週市で買物していると、思わず馴染みの人と出会い、笑いながら挨拶を交わす。

週市を含む生鮮食料品を扱う各種公設市場には、当然、あらゆる社会階層の人々すべてが関わる。しかも、市場、とくに週市においては社会的上下の差は最小である。すなわち、市場での商いはいわば社会の対内的商業で、生鮮食料品を媒介として人々は平等な社会関係を実現する。ゴール社会のいわば水平的統合の主要な場として市場は機能するのである。フォートの商業とはまったく異なり、市場での商いはより人格的である。形式合理的というより、生活維持を直接に目指す。制度化されているていどが少ないだけ、人と人が直接的に関係する。出来事性として市場は特徴づけられる。

公設週市の海側のはずれに、政府のマーケッティング部野菜売場がある。建物に入ると、カウンターの向うに、何種類かの野菜がちょぼちょぼと配列してある。カウンターのわきの黒板に各野菜の価格が表示されている。客は黒板と野菜を見比べながら買物する仕組みである。しかし客の入りは極度に悪く、いつも閑散としている。価格はけして高くはないが、客は品物を手に取って品定めすることができない。係員は無愛想で黙ったままである。商人でなく公務員である。売上げに関係なく給料はある。極端に制度化された商業は、すぐ目の前の週市の開放的な賑やかさと際立って対照的である。市場を特徴ずける出来事性はまったくない。

現在、ゴール周辺の農村では、各地で週市が催される。場所によって、それぞれの開催曜日がきまっていて、どの



農村週市にて。週市が開かれる直前。これまで空虚であった場所に，商人が訪れて来て，商ないの準備を始める。すてられた場所がにわかに活気を帯びはじめ，何時間か後にはもっとも人々が集まる場所となる。この変貌はまさに社会ドラマに値する。

曜日でもどこかで週市が開かれることになっている。しかも、週市が開かれる場所は相互にあまり隔たっていない。平均五マイルもないであろう。週市を訪れる商人もきまっていて、商人は週市を毎日巡回して商う。農民が自分の菜園の産物を持参する事例はほとんどない。すべて専門化した商人である。そもそもゴール周辺農村の週市は、植民地経済のもとでの茶プランテーションの発展による。茶プランテーションに必要な労働者が多く移住してきて集落を形成し、この人々の生活の必要に応じて新しく週市が設定された。農民の多くはプランテーション労働者である。自給農民が自らの生産物の余剰を持ち寄って週市を形成したのではない。週市では野菜と衣料品が圧倒的に多いが、果物、鮮魚、プラスティック製品、刃物類、素焼き鍋など多種類の商品が広い週市の空間を埋める。巡回商人は週市に出ない日は遠方で野菜を一度に仕入れるか、休養である。野菜は

農村週市にて。どこからこんなに人々が集まるのか，といぶかるほどに人々がつぎつぎにやってきて買物する。バス，自転車，歩きなど様々である。商人も各地からくる。しかし定刻を過ぎれば，もとの空虚が支配する。

高地週市で、衣料品、干魚など乾物はコロンボ・ペタで仕入れる。週市が開かれる場所は人家のないところで、たとえば日曜市で知られるヤッカラ(Yakalla)村では、橋のほとりの川沿いの空地である。週市の開催権は一般に村議会（Village Council）にある。毎年、村議会は開催権を入札で特定の村民に与えるが、いつもきまった人が落札するようである。週市を訪れるすべての商人は開催権を落札した人に一定額を支払う。たとえば、屋根付き売場は五ルピー、露天は〇、五ルピーである。これら場所代は落札者の収入となる。週市でとくに興味深いことは、週市の祭り的性格である。いつも人気の全然ない場所が、一週間に一回、特定の時にのみ雑踏の巷にぱっと変わる。週市では馴染みの人、見知らぬ人が行き交い、ときにお喋りする。世間話、家族の消息などである。日頃はばらばらに生活している人々が、なにか一定の磁場に引き寄せられるように凝縮し、きめられた

農村週市にて。人々の多くは茶プランテーションの労働者である。きれいに身仕度して野菜を買う。週一度の晴れの場所であるから。しかしきちんと野菜の品質は見ている。農民が都市に出かける機会はごく限られている。

時刻が過ぎると、さっと居なくなる。ここで市が開かれていたことが信じ難いほど空虚な空間だけが眼前に残ることになる。週市のはずれには、アイスキャンディーを自転車に積んで売り歩く人がいる。

週市と常設市場を比較すれば、農村の週市、ゴールの公設週市から旧市場への展開は、出来事性を弱め、かわって制度化を強めた。旧市場内部はすべて細分化され、特定化されて、ライセンスの対象となる。女性売子は姿を消し、男性のみとなる。売子はより専業的商人となる。生活維持を目的とする商いから、より利潤を獲得しようとする販売になる。トラック業者は投機的ですらある。週市でみられた多様な商品は常設市場では一定の生鮮食料品だけに特化してしまうことになる。人々は週一回の機会を利用して出かけたが、常設市場には仕事の帰りに立ち寄り、黙ってそそくさと買物を済ませる。明らかに市場は、中部商店街、近代工業製品を商品とする専

門分化した商業に対応し、それを補完する。さきにみた市場の開放性も市場経済の枠の中での開放性である。しかし週市の開放性は市場経済のゆらぎの中での開放性といえよう。

商業活動の記述で、最後に触れなければならない商いは行商と職人である。行商の歴史は古く、オランダ支配下では、ムスリム商人が輸入衣料品を行商した。彼等の活動はペドラー・ストリートという地名に記憶される。メイン・ストリートが形成された後でも、衣料店から品物を仕入れて、行商人は農村を廻った。中国人も衣料品を自転車に積んで行商していた。農村の子供は、悪いことをすると、「中国人に連れていってもらうから」、と母親に叱られたという。現在、衣料品の行商はまったく姿を消した。週市の盛況とバスの整備による。中国人行商の一人は、現在オランダ水路に面するハベロック（Havelock）道路で床屋を経営する。床屋は伝統的カースト規制が強く残るが、この中国人は唯一の例外である。古ぼけ変色した写真を貼付したパスポートを現在も所持する。ハベロック道路がある街はチャイナ・ガーデン（China Garden）である。一九二〇年、三〇年代、イギリス植民地行政は農村における週市開設を進めた。[19] プランテーション農業の発達にともなう人口増加への対応と、商人の利潤を抑制するためである。週市開設の結果、衣料品の行商はなくなったが、しかし魚の行商だけは、現在もよく見かける。大勢の行商人が魚を自転車につけておいて、おおよそきまった時刻にきまった道路を売り歩く。行商人は沿岸部に居住する。早朝、浜辺のオークションで魚を仕入れる。低カースト出身の人が多い。利用する客は多く、ゴールの限られた場所での魚販売の不便さをよく補っている。

職人の商人化がいつから始まるのか不明であるが、かつては人々は必要とする金細工装身具を職人に注文してつくらせた。しかし現在では、このような注文生産はいまだ残っているものの、大変少なくなってしまった。多くは店舗

での購入である。このような購入の仕方の変化は、職人の商人化の過程でもあった。すなわち、資力ある職人のもとに何人かの職人が従い、一定の仕事を請負って生産する。資力ある職人自身は直接的に生産をすることはなく、もっぱら製品の販売に関わる。問屋制家内工業にも似る。あるいは、自分の家屋の一部を製作場として、何人かの人を雇う。住込みもあれば近隣からの通いもある。家内手工業である。道具の一部は機械化され、モーターが効率的に働く。ムスリム商人から宝石を仕入れ、金細工装身具に取りつけて、外国人バイヤーに直接的に販売する。有名観光地のお土産物店に販売する場合もある。西ドイツなどヨーロッパにも輸出する。成功して商人化した職人は土地所有者となり、家屋を丘陵の高みに建て、自身はコロンボとの間を往復する。上層階級への途である。このような職人の商人化は金細工装身具に限らない。外国人向けのお土産品である黒檀の象細工職人も同様である。外国人の需要を媒介として、職人の商人化と賃労働者化が進められたのである。しかし伝統的カースト規制がもった影響が残存したため、現在でも特定の職人になれる人々は特定のカースト出身者だけで、他のカースト出身者は事実上参入できない。しかしあとでみる下層カースト出身者の場合でも、職人の場合でも、商人が出現するのは、社会の外部からの力を媒介としていることでは共通である。

フォートから始めて、農村の週市、行商まで商業活動の多様なあり方をみてきた。これら多様な商いの形態を歴史的にみておこう。まず最初にフォートの海外交易とこれに結びついたムスリムの行商があった。扱われる商品はインド産の衣料など外国からもたらされたものであった。商人もオランダ人あるいはイギリス人、ムスリム、チェティアであり、シンハラ人とは明確に異なる文化に属する異人であった。ついで週市の発達がある。植民地経済の発展に平行して週市が広く展開し、生鮮食料品の商品化が始まった。他所者（よそもの）的性格を強くもった商人につきまとういかがわし

さが目立たなくなる過程でもある。商人の異人性はうすれていった。週市は開放的で、農村から都市まで、多様に展開した。しかし、植民地経済のもとで、茶プランテーションは拡大し、商いが恒常化し、日常化する過程で公設の常設市場が開かれた。ライセンスを必要とする秩序性は強まる。露天から堂々とした柱で支えられた旧市場の建物への過程である。旧市場の開設は、メイン・ストリート商店街の成立に対応している。週市でみられた多様な商品は各商店、常設市場に専門分化した。個別に独立した店舗の配列である。しかし生鮮食料品という扱う商品の特性によって、旧市場は個別の商店より開放的である。さらに、このような週市から常設市場と商店街への発達は、さきにみたシーストリートわきの週市の現在の展開として再現されているのである。

商業活動の視点から都市形成をみる場合、とくに興味あるのは、西部の金細工装身具店である。旧市場とくに週市との鋭い対比をさきにみた。空間的にも旧市場からもっとも遠くに位置し、刑務所の向う側に立地する。一つの特異点である。メイン・ストリート、旧市場、週市を中心とする商いによる富の蓄積は金細工装身具として表現された。もっとも自然に近い生鮮食料品を底辺として、すべての商品は金細工装身具に収斂する。富という観念の具体化である。すなわち、金細工装身具は「商品の商品」として位置づけられる。[20] したがって、同じく「商品の商品」である貨幣とつねに交換可能でもあるのである。金細工装身具店だけでなく、現在、人民銀行(People's Bank)においても同じく金細工装身具は質物として直ちに受け取られる。したがって、ゴールにおいて、金細工装身具店の出現、キッタンギは画期的出来事である。農村地域では金細工装身具店は発達しない。金細工装身具店が発達したのはゴール市街地だけである。商品の視点からみれば、農村から都市を区別する基準は、金細工装身具店の発達である。素材としての金は地理的には水平的に社会の外部からもたらされ、観念的には垂直的に金の加工物は社会を超越する。金細工装

身具は社会における外部性そのものを象徴する。したがって金のネックレスあるいは腕環は非日常的な場においてこそ光り輝くのである。日常生活のバスの中では間違いなく掏模の餌食になるだけである。キッタンギを中心とする西部商店街の出現によって農村とは区別されて、都市ゴールははじめて十全に形成されたといえよう。金細工装身具によって階層的社会秩序が目で見えるように表示されるが、実際、都市と農村の間には明確な社会階層差が存在するのである。富は都市に集中し、富を自由にする権力は都市に所在する。金は富であるとともに、権力でもある。農村と都市の間には社会的威信の差は明確にあり、農村は都市につねにあこがれ、渇望し続ける。金細工装身具と野菜の間の差異性は越えがたく、バスで一、二時間ていどの時間的距離ではあるが、都市と農村の間の社会的距離は大きい。

都市ゴールとその周辺農村で商業活動についてみた。行商、週市、各種公設市場、商店街、外国名企業さらには職人の商人化など多様である。これら多様な商業活動は歴史的に形成され、対立、補完あるいは並存して、重層的に堆積し、交易港に始まる都市ゴールの空間構成をかたちづくった。したがって、都市空間には、さまざまな商業活動を媒介として、人々によって生きられた時間の経過が刻まれている。

四、商人の系譜

都市ゴールを形成した多様な商業活動を、おもに商品の視点からみてきた。さらにこれら商業活動の担い手、商人についてもみて補完しておきたい。ゴール社会での商人の系統は多様であるが、おおまかにみれば四つの系統がある。第一にムスリムである。オランダ商人、ついでイギリス商人とシンハラ社会と仲介した。第二にチェティア。チェテ

ィアもムスリムと同じく、オランダ商人、イギリス商人とシンハラ社会の間を仲介したが、とくに植民地時代、インドから米その他多くの物資を輸入していたから、チェティアの果たす役割は大きかった。チェティアは金貸しも行なった。近代的銀行がまだ成立していなかった時代においては、金貸し業が社会分業の拡大に果たした役割は大きかったであろう。第三に下層カースト出身者である。たとえばカラバは本来は漁業に関わったが、ゴールに寄港する外国人に接する機会が多いことから、一部の人々は商人になってゆく。金細工装身具、宝石、レース編み、亀の甲羅細工などをゴールに寄港した外国人に商い、さらに海外にも進出した。下層カーストは歴史的には非土地所有者であるから、海外との関係の変化にも比較的容易に対応し、新しい機会を利用することもできたのである。さきにみた職人の商人化もこの系統に属する。第四に支配カースト・ゴイガマを含むすべてのカースト出身者である。社会の中で特別に意味づけられた人々、たとえば外国人、下層カースト出身者だけでなく、誰でも商人になることが奇異ではなくなった。市場経済が社会全体をおおった結果である。現在、商店街、市場、週市の商人に面接して、氏名・現住所・父親の職業などについて聞き取りした結果、商人の出身カーストは大変に多様であることが明らかになった。むしろ、ゴイガマ出身者の数は多く、過半を占める。市場経済が社会全体をおおい、社会分業が再編成された結果である。現在、都市においては、商人の出身カーストがゴイガマであるかどうかは、あまり意味をもたなくなってしまった。

これらの四つの系統は、それぞれ歴史的にみれば、発達の順でもある。植民地時代、あるいはそれに先立って、ムスリム商人は活躍していた。ついでインドとの交易が盛んになり、恒常化してチェティアが登場した。現在でも、西部商店街の金細工装身具商人あるいは東部商店街の乾物商人としてタミル人が活躍している。下層カースト出身者の一部がいつから恒常的に商人化するかは不明であるが、おそらく植民地支配体制のもとで、市場経済があるていど展

開する過程である。時代的には一九世紀以後であろう。非土地所有者である下層カーストの人々は、展開する市場経済の片隅に現金収入の機会を見つけていく。社会の市場経済化はカーストによる職業構成を変化させ、かわって新しい機会を非土地所有者に与えることになるからである。いうまでもなく、当初は生計を立てるための機会である。しかし商いの規模が拡大して、利潤をも目的とするようになる。最後に土地所有者であったゴイガマ出身者の商人化である。社会の市場経済化がさらに進展して、貨幣が生活維持の不可欠の手段となる。ゴイガマの職業も多様化して、一部は商人化していく。時期的にはゴールの中部商店街が形成される時代で、一九世紀も終わり近くあるいは二〇世紀からであろう。

商人の四つの系統を歴史継起的にみた。これら系統をゴール社会の内部と外部との関係性からみれば、ムスリムとチェティアは外部からゴール社会内部に訪れる商人、いわば異人としての商人である。他所者の性格が非常に強い。下層カースト出身の商人は前二者と異なる。社会内部の周縁に位置づけられていた人々が社会変動の初期の段階で社会の外部との関係をもつにいたった結果である。前二者が社会の外部から内部に向ったに対して、下層カースト出身者は社会内部の周縁から外部に向う。これまでのムスリム、チェティアにくわえて下層カースト出身の商人の活動は、従来の社会の外部と内部の関係性あるいは境界を大きく変えていく。商業はけしてたんなる商品の売買だけではなく、商品を媒介としてこれまでとは異なる社会関係をつくっていく。新しい社会分業が展開する。最後に、ゴイガマを含むすべてのカースト出身者の商人化である。現在、多くの商人はこのカテゴリーに属する。毎朝、住宅地に所在する住居を出て、商店街で商いをし、夜は再び住居に帰る。商人同士は互いに見知らぬ人々である。商店街は見知らぬ他人で構成される。都市ゴールが第一次的都市から第二次的都市に変容した過程に対応するであろう。したがって、さ

きにみた商人の四つの系統の歴史的継起は、異人としての商人から見知らぬ他人としての商人への展開でもある。

異人としての商人から見知らぬ他人としての商人への発展は、現在でも、多様な商人像として見られる。商人全体に対する社会的評価は依然として大変低い。商人には何かいかがわしさがつきまとうというのである。経済的にみれば、たとえば市場の商人は中級・下級の役人よりずっといい収入を得ているであろう。しかし社会的評価はまったく逆で、役人の方がずっと高く評価され、社会的威信を享受できる。商人には賤しさという評価が与えられる。古い異人としての商人像が無くなってしまうのではなく、現在の市場経済の中でも変容しながらも生き続けている。さきにみたムスリム商人、タミル商人の場合では、シンハラ社会にとってムスリム商人は常に陰口の対象であり、ずるがしこいと言われる。タミル人は潜在的な攻撃対象ですらある。「近くにいて遠い」という異人の基本性格には変化はない。商う商品もきわめて特異であり、ムスリム商人は宝石、高級衣料、金物などであり、とくにタミル商人は金細工装身具である。金細工装身具が特別に社会的に意味づけられた商品であることはすでにみた。しかしムスリム商人、タミル商人が異人としての商人の系統を継承することは変らないが、社会の中での位置づけは大変に変化した。かつてはムスリム商人、チェティアが社会のおもな商人であった。下層カースト出身、さらにはゴイガマ出身の商人が多く出現した結果、現在では多様な商人の中の一部でしかなくなった。ゴール社会にとっての外部性の変容過程でもある。この結果、ムスリム商人、タミル商人に対する評価にもいちじるしい変化が生じる。すなわち、異人としての商人には憎悪すべき対象という意味づけが際立つことになる。怖るべき力をもつというもう一つの意味づけは憎悪の裏側にかくされてしまった。他方、ゴイガマ出身の商人と下層カースト出身の商人の間の差異はほとんどない。両者の間には身振り、言葉、服装など、何の差異も見出せない。社会的評価は、彼等が商売に成功しているかどうか、ある

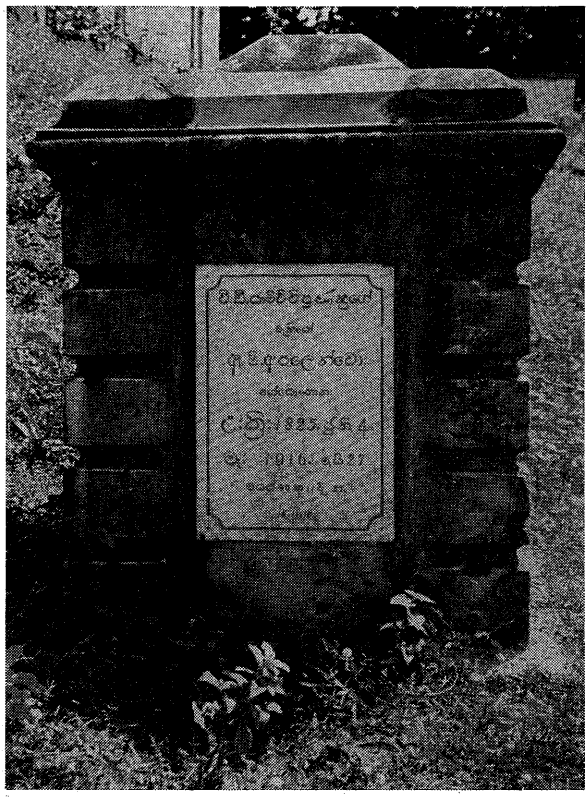
いは裕福であるかどうかで決まる。かつて所属するカーストによって社会的威信が一義的に決められていたこととはまったく相違する。ゴイガマ出身者も成功した下級カースト出身の商人に使役される。多様な商人像もまた都市景観と同じく、都市ゴールが経験した歴史を物語り、同時に景観の一部を構成する。

四つの系統よりなる商人の系譜を概観したが、都市ゴールが経験した歴史を明らかにするために、一人の商人の家系を事例として取り上げたい。この商人はオリー・カースト（Oli Caste）出身で、さきに第三の系統としてあげた下層カースト出身の商人である。シンハラ社会全体では、オリーの人口は大変少ないが、ベラバ・カースト（Berava Caste）とともにもっとも低い位置づけにあった。[21] ベラバに似て、伝統的には悪魔払いの儀礼劇の踊り手であり、土地なし農業労働者であった。とくに海岸に接する低地域では星占いを職業としていた。現在でも星占いはシンハラ社会ではきわめて重要で、結婚はいうまでもなく、人生の節目には星を占って態度を決定する。[22] ゴールでのオリーの人口は大変少なく、おもにカレガナ交差点の周辺に集住している。この地域にいつから居住しているかまったく不明であるが、ベラバと同様に社会的地位はきわめて低かった。かつては男性は上着をつけることが認められず、上半身は裸であった。他人の家に呼ばれた場合でも、必ず低い椅子に座らせられた。オリー自身は、自分たちのカーストはインドより渡来し、本来はクシャトリヤ（武士階層）に属するという。武士階層は国王が属するカーストであり、大変に高貴であるが、スリランカでは不当に扱われているともいう。このような社会的に卑しめられたカーストから、当時のゴールを代表する一商人が現われる。サミッチイ・フェナンド（1867～1929）である。[23]

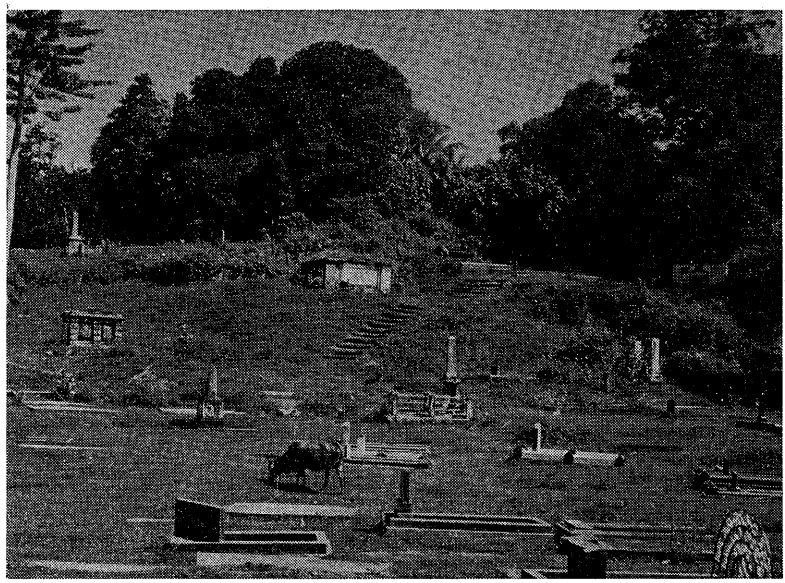
サミッチイはビダーネとアパランチョ夫妻の六人の子供の中の第四子であった（第一図参照）。父ビダーネはドミンゴの第六子である。ドミンゴは高名な星占いで、彼の子供六人の中、二人は若くして病死し、一人はバーガーと結

婚して一子を得たが、この子は若くして死んだ。さらに二人はイングランドに移住している。したがって、七人の子供のうち、二人だけがカレガナに残ったことになる。ビダーネとビダーネの弟ジョシナである。両者の子孫は近隣に住んでいることで、現在にいたるまでずっと日常的に様々な交際は続いている。

サミッチイの祖父に当るドミンゴの七人の子供についてみたが、これからたどるサミッチイの全系図を特徴づける二、三のことに気付く。第一に子供の数が多く、七人、八人は普通である。第二に結婚前に死亡してしまう若年死が多いこと。乳幼児死と結核が原因である。第三にバーガーとの結婚。バーガーはオランダ人の血統を受け継ぎ、シンハラ社会の異人であった。第四にイングランドへの移住である。移住の直接の原因は、粗野な暴力的な振る舞い、婦女



アパランチョの墓。サミッチイの母親に対するつくし方は大変なもので，いまでも一族の間に語り伝えられている。サミッチイが建てた立派な墓石には，生年と没年が刻まれて，建立者の意志を明らかにしているようである。



アパランチョの墓地。この墓が所在する共同墓地には，放牧の牛が悠悠と草を食む。まさに自然である。人は死して自然に還るのであろうか。かつてこの墓地の入口近くにピンターレが置かれ，旅人は疲れを癒した。

子の暴行といわれる。イングランドは遠く届かぬ土地ではなく、人々は海外に対して開かれた認識をもっていたようである。しかし、移住した二人はイングランドで結婚し、ゴールに戻らず、彼等の子孫もゴールと何の関係も持つことはなかった。

ビダーネの住居はカレガナで、幹線道路より少し丘に入った林の中にある。現在でも住居の煉瓦の一部が残っていて、住居跡として子孫が保存している。周囲も含めて、これが都市かという景観である。この辺りは現在も電気が来ておらず、周囲の家屋も土間に椰子の葉の屋根という粗末な建物である。ビダーネの生活も同様に大変に貧しかった。しかし彼の子供達はすべて牛乳を販売して小金を蓄めるようになる。カレガナよりずっと北に向ったワクベラで農家より牛乳を購入し、フォートに住むイギリス人に販売したのである。ワクベラ道路を牛乳を運んで毎日何キロも歩いた。こ

サミッチイの生家。本当の生家はこの家の前に僅かな壁のみを残す。しかしほぼこの家と類似していたという。家は狭く，床は土間。家具らしきものはほとんどなく，みすぼらしく弱々しい犬がうろついている。

うして蓄えた小金をシンハラ人に貸した。当時、日常はあまり貸幣の必要がなくても、儀礼はやはり物入りであった。借金が返済できなければ、土地を手放すことにもなった。ビダーネの子供達、すなわちサミッチイを中心として、兄弟達は土地所有者となっていく。サミッチイの商人としての第一歩はイギリス人への牛乳の販売、ついで金貸しであった。言い換えれば、外部からの市場経済の影響で生じたシンハラ社会の割れ目が、蓄財の場であった。当然、土地を所有するゴイガマに属する人々には、このような割れ目を利用することは想像することも出来なかったであろう。やがてサミッチイは旧市場前のサークルに面して店舗を構え、インドとの間の輸出入業を始めた。現在、彼の孫が政府の販売協同組合に貸している建物である。サミッチイはシンハラ社会に属さない人々、すなわちイギリス人、インド人を知己にもち、有

用な情報を得ていた。サミッチイの商売には彼の子供達、兄弟の子供達も加わって、事業は成功し、拡大した。カレー材料、玉葱、米、干魚、屋根瓦、骨粉などを扱った。とくにインドから肥料としての骨粉の輸入は大成功し、巨利をもたらすことになった。同時に金貸しでも資産を殖やした。不動産をゴールだけでなく、遠方の茶プランテーション、椰子プランテーションを所有するようになり、それらの所有面積も増加させていった。

サミッチイが最下層のカーストから身を起し、商人として成功したことは、当然、ゴールの社会に波風をたてた。サミッチイはイギリス紳士風の服装をし、当時ゴールには三台しかなかった自動車オースチンの一台を乗用車とした。時にはフォートのバーガーを招いて、ダンス・パーティを催した。このような華やかな生活ぶりは、近隣のゴイガマに属する人々の反感とか妬みを買った。妬みはシンハラ社会においても大変深刻な社会感情である。人々が幼少のころより親しんでいる仏陀の前世を物語るジャータカ物語、とくにベーサンタラの布施行は、社会に潜在する深刻な妬みの逆説的表現としても受け取られる。すなわち、無私の布施行が、王者の条件となる。[23] サミッチイは二回、刺客にねらわれたという。ゴイガマの有力者がサラガマ・カーストの殺し屋を雇ったのである。事態を察知したサミッチイは別の殺し屋を雇って先制攻撃し、危険を乗り越えた。当時のゴール社会では、腕力とその延長としての刃物の所有にもとづく直接的な力が社会的地位を維持するために非常に重要であった。腕力にまさるというだけで、周囲から畏怖の念でみられた。サミッチイ自身が大きながっしりした身体の人であった。彼は姉妹の夫にも腕力の強い人を選んでいる。支配カーストに属する人々の一部との間に緊張関係にあったが、サミッチイと支配者イギリス人との間は円滑であった。彼の息子が酔って人を誤って殺害した時も、サミッチイはイギリス人の役人と交渉して無罪放免とさせた。しかし、息子には被害者の遺族の面倒を一生みるようにと言い渡したという。イギリス人地方長官の歓送会にも

ムスリム商人とともに出席し、その際の記念写真を現在に残している。すなわち、イギリス植民地行政とシンハラ社会を媒介する役割をも果たしていた。

サミッチイのもう一つの側面は慈善家である。とくに仏教寺院に多く寄附して、当時の仏教再興運動に力を尽くした。地元カレガナの仏教寺院の建物、石段、さらには水田までも喜捨している。他の仏教寺院にも建物の一部などに相応の寄附をしている。スリランカの仏教再興の指導者ダルマ・パーラに共鳴し、多くの財政援助もしている。いうまでもなく、仏教寺院に対する数多くの寄附は自らの後生を願ってのことではあるが、同時に社会的にも大きな意味をもつ。仏教寺院に寄附することで、社会的な力である富は浄化されるからである。富の蓄財につきまとう悪どさとかい

サミッチイの墓。肖像付きの立派なイタリア輸入の墓石で，他に例をみない。偉丈夫さが偲ばれる。墓所はカレガナ交差点近くに所在し，ここは一族の墓所であり，いくつかの墓石は草に埋もれている。

かがわしさが浄められる。したがって、寄附者の社会的地位が正当化される。最下層のカーストから出世して成功したサミッチイは社会的にも寄附をせねばならなかったといえよう。

サミッチイは一九二九年、コロンボで亡くなった。サミッチイとサウディナの間には四人の男子と一人の女子が生まれた(第二図参照)。すなわちマーシャル、シンナチ、ダビッド、パリスとアランガである。ただ一人の女子であるアランガは早死した。したがって、他の四人の系図を年齢順に追ってみよう。まずマーシャルである（第三図参照)。

マーシャルは父と同じく商業を営み、メイン・ストリートに店舗をもった。現在、医薬品、化粧品で繁昌しているラル・カンパニーの建物である。カレガナの自宅の庭の一隅に小屋を設け、ゴールでは始めてとされる石鹸の製造をも行なっている。マーシャルは金貸しもしていて、兄弟とともに情容赦ないことで知られた。しかし、ある日、南部から訪れた行者と貸金のことで口論となった。その翌日、突然、意識がありながら口がきけない状態に陥った。マーシャルはブラック・マジックをかけられたと噂された。早速、医者を呼んだが効なく、高名な祈禱師も呼んで、彼の妻メグリンはお盆にコインを山盛りにして経文一節を唱えるごとに、コイン一つを与えたという。しかしマーシャルの口は再び自由になることはなく、一週間ほどで亡くなった。メグリンは大変気性の激しい人である。一五ポンドもする金の首飾りを誇らしげに身につけ、結婚式では自分が身につけている装身具が最高であることを確かめた。メイン・ストリートに出かける時には、金の装身具を着け、馬車に乗った。ゴイガマ・カーストの有力者の憤激を招いたものである。自分自身も女達に金を貸して、金の装身具を借金のかたとして容赦なく取り上げた。メグリンはサミッチイの妹ドーチョの娘であるから、マーシャルとメグリンは交差イトコ婚である。一般にゴールでは、結婚に際してはまず交差イトコが選ばれる。したがって、全家系図を眺めると、相当数の交差イトコ婚をみることができる。この

結果、従兄弟でも兄弟の間のように身近に感じられる。蓄積した資産は相続に際して分割されるが、かならずしもいたずらに四散してしまわない。しかし実際には、常に結婚するに適当な交差イトコが居るわけでなく、むしろ交差イトコでない血縁者あるいは非血縁者と結婚する事例の方が多い。非血縁者も同一オリー・カーストに属する。

マーシャルとメグリンの間には五人の子供がいるが、第二子ヒルダは早死したので、四人について簡単にみておこう。長女ムリエルはリリーの兄弟ウイルソンと結婚した。リリーはマーシャルの弟シンナチの妻である。したがってムリエルとウイルソンは義理のメイとオジの間柄にある。ウイルソンはフォート所在のセイロン銀行に勤めていたが、現在はすでに亡い。ムリエルとウイルソンの間に三人の子供があり、二人は医者になってロンドンで暮らす。二人ともタミル人と結婚している。残りの一人は下半身麻痺の障害児である。ムリエルはチャイナ・ガーデンの住居を売って、現在、コロンボのバンバラピィティヤに移住している。繁華街に近い住宅地である。第三子ビクターはコロンボの政府機関で事務員として勤めていたが、現在は引退してカレガナのワクベラ道路に面する二エーカーもある広い敷地をもつ住居に住む。コロンボに所有する不動産からの収入で悠々と暮らしている。三人の娘がおり、長女はコロンボ大学に在学中である。次女は高校生で、三女は視力障害者である。ビクターの家と道路を隔てて、マーシャルが住んでいた家がある。現在は第四子スタンリーの住居である。スタンリーはデニヤナに茶プランテーション三五エーカーを所有し、経営する。いつも車でデニヤナとの間を往復する。ゴールでは茶プランテーションの所有者は資産家とされる。彼は日本にも観光で訪れている。子供は三人いて、長男は教員で、先頃、コロンボの最高級ホテルであるオベロイで結婚式を挙げた。花嫁は有力な事業家の娘である。スタンリーにとって長男の結婚式はいまでも自慢話で、来客に沢山のカラー写真で説明する。他の二人の子供はいまだ学生である。スタンリーとさきのビクターは道路を隔

てて住んでいるが、二人の間柄は大変悪く、互いに口をきかないほどである。しかしさきの結婚式にはビクターも出席している。マーシャルの第五子ノーラはグナセーナと結婚した。メグリンの妹ピーロの息子サイモンの息子である。グナセーナもフォートのセイロン銀行の事務員であったが、すでに亡くなった。ノーラはラルとその隣りの茶販売店の建物を相続し、家賃収入が十分にあり、裕福である。子供はネリー一人だけであるが、ネリーはセマラートと結婚して三人の子供がいる。セマラートはコロンボ港に勤める優秀な技師である。両親はロンドンに在住し、父親はパブリック・レコード・オフィス（Public Record Office）に勤める。ノーラと娘、孫はチャイナ・ガーデンの広い庭の、とても大きな猛々しい犬のいる家に住む。セマラートは週末をこの家で過ごし、月曜日にここからコロンボに出勤する。ノーラ所有のラルが借りていた建物は、近年、ラル・カンパニーに売却した。

マーシャルについで、サミッチイの第二子シンナチの系図を追ってみよう（第四図参照）。シンナチは父親の事業を継承して、ゴールでおもにインドとの輸出入業を営んだ。しかし父親ほどには一族の信望はなく、したがって多くの人々の働きを統合することも難しかった。サミッチイの事業は分裂していった。さらに三〇年代の不景気、戦争と続いた。シンナチは事業から退いて、父から相続した不動産で暮らすようになった。父親の資産を男兄弟四人だけで分割してしまい、事業の成功に貢献した親族にはほとんど何も与えなかった。この結果、シンナチは相続した資産からの家賃収入で十分に裕福に暮せた。事業から退いたシンナチはコロンボに居住する彼の第四子サムエルの家で暮した。しかしある日、シンナチは悲劇的な最後を遂げる。当時、下半身麻痺のシンナチは車椅子の生活であった。床の上に落したタバコの火が敷物を燃やし、身体にまとった毛布にまで燃え上がり、やがてシンナチを火で包んだ。結局、全身大火傷で劇痛の中に亡くなった。シンナチはカルタラ出身のリリーと結婚した。サミッチイがゴールとコロンボ

を往復する途中、しばしば立寄った家族の出身である。リリーは気の強い男勝りの女でああったためシンナチの兄弟の妻達との仲は良くなかった。むしろ喧嘩状態であって、サミッチイの死後、一族の分裂に拍車をかけた。シンナチとリリーの間には五人の子供がいる。第三子ジャネットは若死しているので、残る四人の子供について年齢順に追ってみよう。

まず第一子デージィーである。デージィーはウイルモット・デ・シルバと結婚する。ウイルモットはメイン・ストリートで雑貨屋を経営した。しかしトランプ賭博で悪名高く、アラック酒も一本を空けてしまうほどの酒飲みであった。デージィーとの間に五人の子供がいる。二人は結婚して他の土地で暮しており、残り三人はまだ独身でデージィーと一緒にカレガナ幹線道路に面した家で暮す。ウイルモットはすでに亡い。デージィーの悩みは三十を超えた娘がまだ結婚できないことである。カースト規制、財産目当ての男など、難しい問題がある。デージィーの経済生活は楽で、毎月の家賃収入がきちんと入ってくる。ワクベラ道路と鉄道線路が交差する近くに立地する古い大きな建物も所有している。

第二子マーガレットはアーサー・フェナンドと結婚した。彼は郵便局に勤め、現在はすでに亡い。住居はやはりカレガナの幹線道路に面する。二人の間に子供が八人いる。このうち二人はサウディ・アラビアに出稼ぎにいっている。他地方で三人が生活し、残り三人がまだ独身で、マーガレットと暮している。

第四子はサムエルである。コロンボ・コルピィティヤの最高級住宅地で立派な家に住む。コロンボというよりスリランカ商業の中心地コロンボ・ペタに建物を所有し、多額の家賃収入を得ている。病いに倒れる前は弁護士で、政界の有力者とも親しい交際関係にあった。しかし突然、身体麻痺に襲われ、口もまったく利けなくなってしまった。現

在は家で寝たきりで、精々、車椅子で家の中を動くていどである。かつての華やかな生活は暗転した。意識ははっきりしていて、時折の来客に涙を流す。サムエルはスマナと結婚し、四人の子供を得た。第一子ガンガはロンドンに四年間留学し、経営学を学び、立派な英語を話す。コロンボのヘイリー会社に勤めていたが、現在は輸出入関係の自分の会社をもつ。日本にも何回か立寄っている。第二子はフィルム現像所に勤める。第三子はペタに所在する会社の事務員である。第四子はまだロイヤル・カレッジの学生である。コロンボの最高の名門校である。学校の休暇を利用して、イギリスに旅行したりする。この四人はすべていまだ独身で、両親と共にコルピティヤに住む。

第五子はモニカである。カルタラ出身のリヤナワッタと結婚した。リヤナワッタは郵便局に勤め、現在はバンデルベラに居住する。二人の間に子供は三人いて、上の二人はすでに事務員として就職しているが、末子はまだ学生である。三人とも独身で、バンデルベラで両親と共に暮す。

シンナチについで、サミッチイの第三子はデビッドである(第五図参照)。洒落者で、いつもかっこよくタバコをふかしていた。デビッドも商人で、メイン・ストリートの、マーシャルの店に隣接して店舗を開いていた。住居はやはりカレガナに近く、幹線道路とここから東に別かれる道路の交差点に位置している。かつてイギリス植民地行政官吏の家屋である。現在この建物は少し古びているが、天井は高く、前庭とともに全体としても趣きのある住居である。デビッドはアリスと結婚した。アリスも大変気性の激しい強烈な女性として知られる。二人の間には一二人の子供がいる。

デビッドの第一子はウィルバートで、水田とゴムのプランテーションを所有する。第二子のビオレットは生まれつきで足を引きずっているが、駆け落ちして出身家族との関係を絶たれた。駆け落ちの相手は魚市場の近くで仕立屋を営む。第三子タイタスはデニヤナで茶プランテーション二五エーカーを所有する。第四子ムンダーサはウォーカー・

アンド・サンズの事務員である。第五子セーナーはコロンボ国際空港に隣接する免税地域の事務員である。第六子は郵便局員と結婚し、四人の子供のうち男三人はリッチモンド・カレッジ、女子はサンガミッタ女子学校に通う。第七子アミタは街のカメラマンと結婚している。第八子アナンダは下半身麻痺で、第九子ラランは狂犬病で死ぬ。第一〇子ネルソンは国営センロン運輸公社に勤め、茶プランテーションと製茶工場を所有する女性と結婚した。第一一子チャンドラー、第一二子マリカはいまだ独身であるが、マリカは土地開発会社に勤める。デビッドの一二人の子供の現況をごく簡単にみたが、圧倒的に事務員である。ウィルバート、タイタスにしても、相続した土地を経営はしているが、商人という印象にはほど遠い。他の系統にも共通しているが、とくにデビッドの系統では、下層カースト出身者が成功した商人の資産を媒介として都市のサラリーマンになってゆく一つの事例である。

デビッドについで、サミッチイの第四子パリスである（第六図参照）。パリスはこれまでみてきた兄弟とは異なり、早くから大変華やかな生活をおくる。コロンボのロイヤル・カレッジを卒業し、ロンドンで医学を学ぶ。父親から相続したキャンディの茶プランテーション二〇〇エーカーを売って、外国に行き、帰国してからも金離れのよい派手な生活をした。女好きでもあった。しかし事業にも着手して、椰子の繊維を利用してマットなどをつくる工場を創設し経営した。パリスは二度結婚した。最初はコロンボのバーガー出身のメアリーとである。二度目は、メアリーの死後、イトコの娘シータとである。

パリスとメアリーの間には一人娘アイリンがいる。アイリンは父親の援助でロンドンに留学して医学を学んだタイタスと結婚した。タイタスは最新の設備をもつ大きな診療所を経営したが、現在すでに亡い。タイタスとアイリンの間には三人の娘がいて、それぞれ結婚している。第一子は医師とで、さきの診療所を経営している。第二子は高級技

術者、第三子も高級技術者とである。三組の娘夫婦とも立派な住居と自動車をもって、コロンボの上層階級に属する。彼等の息子達はすべてロイヤル・カレッヂに通っている。

パリスとシータの間にも娘が一人いる。プレティーで、コロンボの会計学校を出て、公認会計士の資格をとり、母親を手伝って、母親の経営する会社の仕事をする。パリスから相続した労働者五〇人ていどの椰子繊維工場である。彼等はコロンボの最高級住宅地で、オランダ風家具、ピアノのある立派な家屋に住む。さきのアイリンとシータの間は大変に悪く、両者はほとんど往来していない。シータはコロンボ郊外に住む自分の実姉ローラをしばしば訪れる。姉は成功した雑貨屋を経営する裕福な商人の妻である。しかし自分の出身地、ゴールのカレガナに戻ることは、何かの行事の際以外にはない。アイリンはまったくコロンボの人で、ゴールはただの田舎でしかないようである。

下層カースト出身の商人サミッチイの子供、孫、曽孫を追って、三、四、目立つことについてみておこう。第一にサミッチイに似た商業活動、輸出入活動を行う人はサムエルの長男ガンガ以外にない。この場合でも、サミッチイの事業を直接に継承しているのではなく、曽孫がたまたま輸出入業を始めたのである。言い換えれば、サミッチイが蓄積した資産は事業拡大あるいは拡大再生産を目指す資本としては機能しなかった。下層カースト出身者がゴール社会の内部と外部を媒介して、巨富をきずき得た時代は大変短かったのである。第二に、サミッチイの商業活動から得た利益の多くは建物、土地などの取得に当てられた。これら資産は子供達の間で分割され相続されて、子供、孫の経済的繁栄の基礎になった。第三に、安定した資産による収入と高等教育が結びついて、多くの人が社会階層を上向し、上層階級にも仲間入りした。ロンドンに移住して、安定した生活を暮す人もいる。商業の成功が伝統的カーストによる社会階層を現実的に無意味にした一つの事例である。しかし婚姻に関しては現在もなおカースト規制は深刻な問題

とされている。第四に、一族の中での経済的格差、さらには生活スタイルの相違は非常に大きい。コロンボに住む裕福な資産家からゴールでその日暮しに近い生活の人まである。経済変化は、一方ではカーストをある面では無意味にしつつあるが、他方ではそれまでになかった差異を人々の間に持ち込み、新たな社会分化をもたらした。第五に、一族間の関係である。個人個人によって一族の人々との関係のもち方は非常に異なる。中心になる人物はなく、個人個人がばらばらに関係しあうのである。しかし何か特別な行事、たとえば結婚式には出席するというような関係性はまだ継続している。もし近隣に住んでいれば、手製の料理、ケーキを与えあう事例もみられる。しかし互いに資金を出しあって事業を行なうことはない。少額の貨幣を当座に借用することはあるが、多額の貨幣を一族だからといって貸借することもない。互いに共通の祖先をもつという家系の意識も強くないのである。一族意識は稀薄である。経済単位は、明らかに、独立した家族、すなわち夫婦とその子供単位であって、兄弟姉妹さらには叔父、叔母の関係はほとんど関与していない。

サミッチイの直系の系図を追ってきたが、サミッチイには女兄弟が五人いる。彼等にはサミッチイのような商売上の華々しい成功はないが、サミッチイの事業を手伝い、あるいは身近な親族として彼の生活と互いに深く関与した。現在でも、サミッチイの女兄弟の孫は、サミッチイを祖父と呼んでいる。したがって一人の商人の系図を追う場合、彼の兄弟の系図もみておく必要がある。省略して記述しておこう。まず長女レンチナからである（第七図参照）。レンチナはババンチと結婚し、四人の子供を得た。レンナチの系統はカレガナに隣接するボーペに多く住む。第一子バンジャヤはノーネと結婚したが、ノーネとの間には子供はなかった。ノーネが亡くなって、ゴールのバーガー、オースチンと再婚した。オースチンとの間に五人の子供がいる。オースチンがバーガーということもあって、子供、孫は

英語が堪能であったという。第一子リッシーはジョンと結婚して、三人の子供を得た。二人の娘は看護婦となり、息子はA級資格の技術者であり、国外に稼ぎに出る。彼の妻も看護婦で、五人の子供がいる。両親が不在でも子供達はステレオを楽しみ、父親の土産である語学教材に耳を傾けて楽しんでいる。バンジャヤの第二子リータはフェナンドと結婚して二人の子供を得た。長男はモラワカの地方長官に出世し、次男はゴール港の事務員であった。レンチナの第二子ノーネはコロンボでガルシンハと結婚した。ガルシンハは星占いである。二人の間に一人娘スウィニーが生まれ、女医となった。スウィニーは医師スレンと結婚して、二人の子供を得た。現在、二人ともロンドンに在住し、一人は医師、一人は技術者である。レンチナの第三子アリスはバタイヤと結婚する。ガルタラに近いパヤガナの星占いである。二人の間に六人の子供がいる。第一子ピーリスは村長で、二人の娘を得た。長女はカマラで、次女はノーブル。二人とも看護婦である。カマラの四人の子供はみな英語教師である。アリスの孫にはコロンボの医師、ガルタラの僧侶もいるが、ほかには教師が目立って多い。レンチナの第四子タイニーはアトラリヤと結婚した。鉄道の駅長であった。二人の間に一人息子カシヤスがいる。ゴール港湾に勤めていたが、酒飲みで悪名が高かった。カシアスはカマラニーと結婚し、四人の子供を得た。第一子マーラは教師で、銀行員デーバと結婚した。第二子スジャータも教師である。第三子は医学生、第四子は学生である。

レンチナに続いて、サミッチイの姉シートがいる（第八図参照）。シートはバビヤと結婚し、カレガナに接するサプマル・プレイスの鉄道線路を見下す丘の斜面に家を構えた。よく茂った林の中である。バビヤは大男で、力持ちであったから、皆に怖れられながらも、信望はあった。ギン河を運航して、内陸部のバッデガマとゴールの間の運送業に従事していた。シートとバビヤの間には五人の子供がいる。五人の中では、第二子バーナードがとくにサミッチイ

と関係が深い。バーナードはマヒンダ・カレッヂを卒業後、南インドに渡り、インド商人と商業上の関係をつくる。この関係でサミッチィが骨粉肥料その他をインドから輸入して、巨利を得る基盤とした。バーナードはサミッチィが亡くなるまで、サミッチィと共に事業を推進してきた。しかしサミッチィの死後、彼の遺産はシンナチを中心にサミッチィの息子の間だけで分割されて、バーナードは遺産相続者から除かれた。この後、バーナードはシンナチと別れて、独立して宝石を中心に事業を継続したが、すでに事業を拡大できるような社会状況ではなかった。バーナードはカロリーンと結婚したが、カロリーンの母方の祖父は星占いである。バーナードとカロリーンの間には十人の子供がいる。

バーナードの第一子グレイスは早死した。第二子ナンダはクルナセーナと結婚した。コロンボの政府直営店の事務員である。二人の間に六人の子供がいて、運転手、教師など独立して収入を得ている。末子アソカは祖母カロリーンの家で暮し、セント・アロイシアスに通学中である。ナンダに続いて、第三子ウイマラは椰子プランテーション所有者と結婚した。水田も所有している。しかし、子供はない。第四子ヘンリー、第五子ハリソンは共同で旧市場わきの店舗をムスリムから借り、ラジオ修理をしている。五十を過ぎて、二人ともまだ独身である。カースト規制、未婚の妹がいて結婚は難しい。ヘンリーは非常な巡礼好きで、毎年、団体でアヌラダプラ、アダムス・ピークなど有名な巡礼地に赴く。同じ場所に何度も行っている。巡礼が最大の楽しみだと云い、巡礼中の出来事を人々に語る。第六子テニソンはコロンボ港湾局に勤め、看護婦のウダリスと結婚して一子を得た。第七子クムスは早死である。第八子バードラは未婚である。第九子シリメワンはコロンボの法律学校中退後、シンガポールに仕事の機会を求めて出かけたが、現在はゴールで中古モーター・バイクの販売などメカニックに関する雑業をしている。第十子フェナンドはカレガナ

郵便局の局長である。母親カロリーンと兄弟達が住む幹線道路に面する家と道路を隔てて郵便局は位置する。カロリーンと子供達が住む家屋は、パリスの後妻シータから安く購入した。シータはこの家屋をあとでみる父サイモンから相続したのである。広い前庭があり、建物は現在では古びたオランダ風である。建物の背後は林で猿が樹間を渡り歩く。

シートの次は、サミッチイの妹ドーチョである（第九図参照）。ドーチョはサンドと結婚した。二人の間に七人の子供がいる。第六子がメグリンで、サミッチイの長男マーシャルと結婚したことはすでにみた。第四子マンメルはパヤガナの星占いの娘マギーと結婚し、長男グナセーナを得る。グナセーナが、メグリンの娘ノーラと結婚することも同様にすでにみた。ドーチョの第一子はアリスで、マータラの商人サヤンデイリスと結婚した。二人の間には五人の子供がいる。第一子リジーはプランテーション所有者ペリスと結婚し、二子を得た。長男はヌワラ・エリヤで視学官を勤める。長女がプランテーションを相続した。第二子はリナで、雑貨屋を営むピーリースと結婚して、ウェリガマに住んだ。九人の子供を得たが、結核で亡くなった。第三子はルイザで、運転手であるモリスと結婚した。二人の間の一人息子マヘンドラはラジオ店で働く。第四子はリディヤで、プランテーション所有者ウィルマダーサと結婚した。二人の間の一人息子はコロンボのロイヤル・カリッジの監督官である。第五子ポーリスはアリスと結婚する。ポーリスは非合法の椰子酒をつくり、アリスはマットの織り手である。

ドーチョについて、サミッチイの末妹ピーロである（第十図参照）。ドーチョはババーナと結婚して、二人の間に四人の子供がいる。この四人の系図を追うと、これまで調べた何人かの人と交叉する。第一はルシーで、伝統生薬の医師ベダイと結婚した。二人の息子を得たが、二人とも早死した。ピーロの第二子はヒネオでバブンと結婚する。バ

ブンはマータレで農業を営んでいた。マータレは旧都キャンディの北部に位置する。婚姻による社会関係が中央高地深くにまで至った。しかも農業者であることも興味深い。これまでみてきた婚姻関係はほとんど非農業者との間でのみ成り立っていたからである。マータレに移住したヒネオの孫クマラは、さきにみたマーシャルの第四子スタンレーと結婚して、ゴール・カレガナに居住することになる。第三子サイモンはゴールでカレー材料を商う乾物屋を経営し、アリーナと結婚した。アリーナはゴール内陸部のアハンガマ出身である。さきにコロンボからゴールに至る途中で立ち寄った土地である。サイモンとアリーナの間には七人の子供がいる。第一子はローラで、コロンボで商人ダーリスと結婚して一人娘チトランを得た。商いは成功して、非常に裕福である。チトランはコロンボの政府企業の事務員である。第二子アレスは早死した。第三子ハリオットはゴール地方長官ノーニスと結婚したが、結核で早死した。ハリオットの息子ラトナカラは大学教授になり、彼の娘は有名なダンサーである。第四子リリーも結核で早死した。第五子シータはさきにみたパリスの後妻である。現在でも、旧市場に近いオルコット通りに面した旧骨粉倉庫を人に貸して、ここからも少なくない家賃収入を得ている。これもパリスの遺産、すなわちサミッチイの資産であった。第六子グナワティは早死した。第七子ガルネルはリーラワティと結婚した。さきのダーリスの妹である。二人の間に三人の子供がある。第一子ラクマンはイギリスに在住し、織物関係の技術者で、女性法律家と結婚している。第二子クウィトスはコロンボ在住で、キリスト教徒のタミル人と結婚している。第三子はチトラで商人ジャヤワルデナと結婚し、ウェリガマの母親の家に居住している。ウェリガマはゴールとマータラの中間に位置する漁港の街で、サミッチイ一族と関係が深い。多くの人々が婚姻関係をもっている。

ピーロの第四子ジャミイスはオシナと結婚した。オシナはアハンガマ出身である。二人の間に六人の子供がいる。

第一子はエディーで、ゴールでパン屋をしていたが、結婚前に亡くなった。バイオリンが上手であった。第二子ウィルモットはさきにみたシンナチの長女デージーと結婚した。第三子アーサーはシンナチの次女マーガレットと結婚している。第四子カトリーンは看護婦で、コロンボ・テキスタイルに勤める事務員と結婚した。第五子タイタスはパリスの娘アイリンと結婚した。第六子パールは教員で、グラビダと結婚した。さきにみたシンナチの妻リリーの兄弟である。二人の間に三人の子供がある。第一子は飛行機技術者で、裁判官の娘と結婚した。第二子は建築家で、大学出の女性と結婚した。第三子は蒙古児症である。

サミッチイの姉妹、レンチナ、シト、ドーチョ、ピロの系図を省略しながら簡単に辿った。サミッチイの事業の共同推進者、イトコ婚、親族間の婚姻の多岐にわたる繰り返しなど、エゴを中心とする複雑にからんだ社会関係の一部が明らかにされた。地域的にもゴール・カレガナからコロンボに拡大し、一部はパヤガナ、マータラ、ウエリガマ、マータレにも及んだ。すなわち夫婦とその子供を単位とする世帯あるいは家族だけを対象として取り上げるのでは、人々の生活を記述することは難しい。複雑に分岐し、境界を特定できないような大きな流れの中での位置関係を視野に入れておかねばならない。しかもこの社会関係は静止し固定してはいない。歴史的に急速に変りつつある。たとえばゴールの誰かがコロンボに出かければ、どこか自分の親戚のところに泊まる。何かの機会には出席して共同に行事を今でも行なう。しかしながら、親族間の紐帯が緩み、個人個人がバラバラになりつつある傾向も否定しがたい。とくに資産を多くもつ人々の間にはこの傾向はいちじるしい。むしろとくに裕福ということはないが、さしあたって生活に困ることなく暮している人々の方が互いに親しい関係を維持しているようである。互いの住居が近接していれば日常生活で互いに親密に往来している。

サミッチイの莫大な資産は彼の息子、さらには孫に継承されて、親族の中での一群の資産家を形成した。サミッチイの姉妹達も多かれ少なかれ、土地取得して資産形成した。この資産も子供、孫と継承された。したがって、当然、二代、三代と経過する過程で、親戚の中での経済的格差は大きくなった。さらに教育がこの格差を文化的にも強化する。経済的余裕はより高度な教育を子弟に受けさせる。高等教育が社会的威信を高めるのは当然であるが、望ましい就職の機会をも与えるからである。さきに低いカースト出身者が、成功した商人の富を媒介して、サラリーマン化してゆくことをみた。しかし親族全体を見渡せば、当然、サラリーマンだけではない。サラリーマンを多数としながらも、ほかに資産収入者、プランテーション経営者から小商人、労働者まで多様な職業を構成する。言い換えれば、サミッチイを中心とする親族間の社会分化は、ゴール社会がこの百年近くの間に経験した社会変化、すなわち社会の市場経済化の一断面である。したがって、この断面を克明に辿ることで、ゴール社会全体の歴史を映し出すことも可能になる。一断面に全体性が宿ることでもあろう。二、三注目すべきことをみておこう。第一に、サミッチイの世代の生業は商い、星占いが多いが、彼の孫の世代では職業は多様に分化し、とくにサラリーマンが圧倒的に多い。この世代間対比は、さきにみた金細工装身具を原点とする商品世界に現在の近代工業製品がつくる商品世界が上から重なり習合していることに対応している。系譜の連結と世代間の断絶。第二に、サミッチイの世代では、身体が直接的に所有する力、たとえば腕力あるいは智力が社会関係をつくり、維持した。しかし彼の孫の世代では、身体の直接的な力より、むしろ資産所有あるいは教育が社会関係を規定する。腕力が強いことは社会的にはあまり意味をなさなくなった。資産所有と教育はいわば身体がもつ直接的な力の社会的延長として位置づけられよう。このような世代間対比も、さきの二つの商品世界の重なり習合に対応する。第三に、サミッチイの孫の世代では親族間での経済格差は大きく、

資本家もいれば労働者もいる。市場経済に割れ目が生じた場合、必ずしも明瞭に彼等の間で階級対立が争われるわけではない。経済的利害関係に親族の意識が複雑な影を落とす。深刻な経済危機に際して、新たにナショナリズムが喚起あるいは発明される基盤である。経済問題が民族問題に転調されることも容易で、ただの一歩もないであろう。

サミッチイが生まれ育った土地、彼の住居、店舗、さらには墓所を見る。この一族の住居、現存の人々との面談。これらの作業を繰り返すことで、さきにみた街のすがたに一層の馴染みを覚え、景観を人々の経験の中に見ることができるようになる。資産所有と教育が身体の直接的な力の社会的延長であることを手がかりにして、日常生活についてみてゆこう。

16　外国名会社の概要については、次の文献を参照。セイロン全般についての商業活動を知るためにも便利な文献である。Thomas Villiers, *Mercantile Lore*, Ceylon Observer Press, Colombo, 1940 チャールス・ヘイリーについては、同社の自社紹介パンフレットも有用である。

17　スリランカ全体を対象とする調査であるが、次の文献は参考になる。野菜の流通経路。流通の各段階での価格、流通業者と生産者の間の関係性の重要さなど、興味深い。

P, J, Gunawardena and Athula Chandrasiri, *Factors Influencing Vegetable Prices : A Study of the Vegetable Economy in Sri Lanka*, Agrarian Research and Training Institute, Colombo, 1980.

18　スリランカの週市について、次の文献を参照。ジャクソンは、週市の発達と植民地プランテーション農業の展開が平行することを図化していて、参考になる。

S. M. P. Senanayake, *Periodic Rural Markets in the Kurunegala District*, Agrarian Research and Traning

Institute, Colombo, 1980.

Deborah Winslow Jackson, "Polas in Central Sri Lanka : Some Preliminary Remarks on the Development and Functioning of Periodic Markets" in *Agriculture in Peasant Sector of Sri Lanka*, ed. S. W. R. de A. Samarasinghe. Peradeniya, 1976.

19 イギリス植民地行政の年次行政報告書（*Public Administration Report*）を参照。

20 「商品の商品」については、拙稿を参照。友杉　孝　前掲論文。

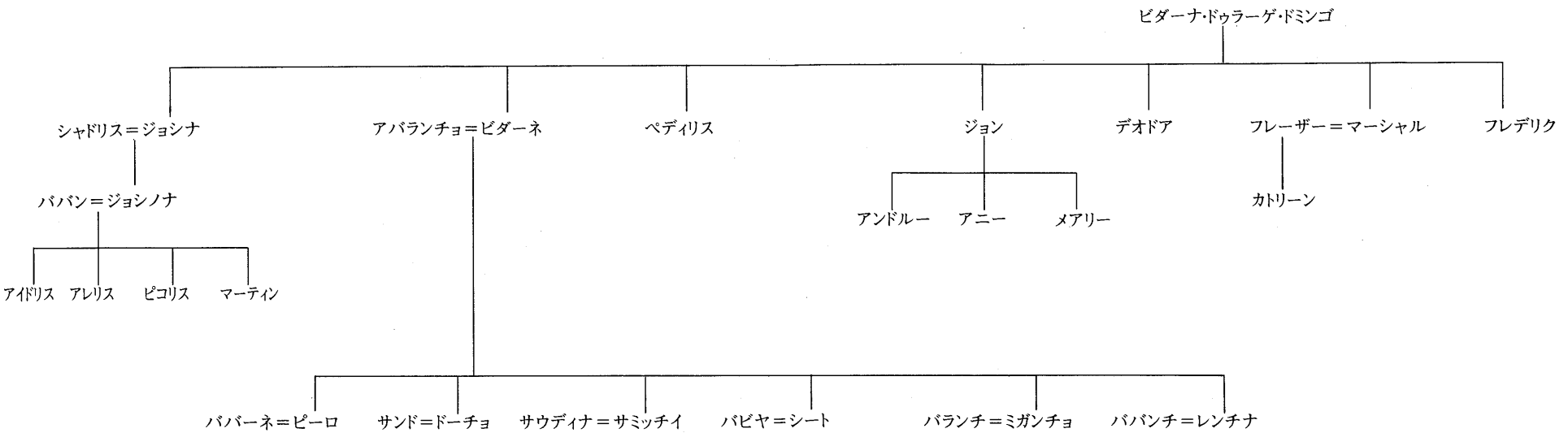
21 シンハラ社会全体についてではあるが、次の文献はカースト社会の概要を知るために現在でも大変有用である。Bryce Ryan, *Caste in Modern Ceylon*, Rutgers Unive. Press, New Jersey, 1953.

22 ペリンバナヤガムはジャフナのタミル社会を対象とするが、大変興味深い。占星術を社会と個人に関する神話的言語として、占星術を研究の主題とする。社会と個人と宇宙的秩序に関する明晰な幻視について論述。N. S. Perinbanayagam, *The Karmic Theater*, Uiv. of Massachusetts. Press, 1982.

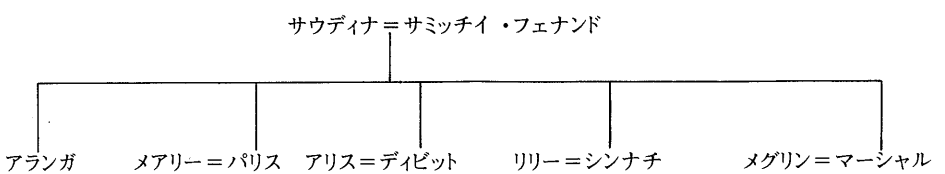
23 サミッチイ・フェナンドとその一族にかかわる記述は、すべてシリメワン・フェナンドによる。彼はサミッチイの妹シトの孫に当る。彼が作成した系図を基礎にして、調査を進めた。

24 次の文献は仏教寺院の壁画についてであるが、スリランカ社会の文化を知るためにも大変興味深い。Margaret Cone and Richard F. Gombrich, *The Perfect Generosity of Prince Vessantara*, Oxford Univ. Press, 1977.

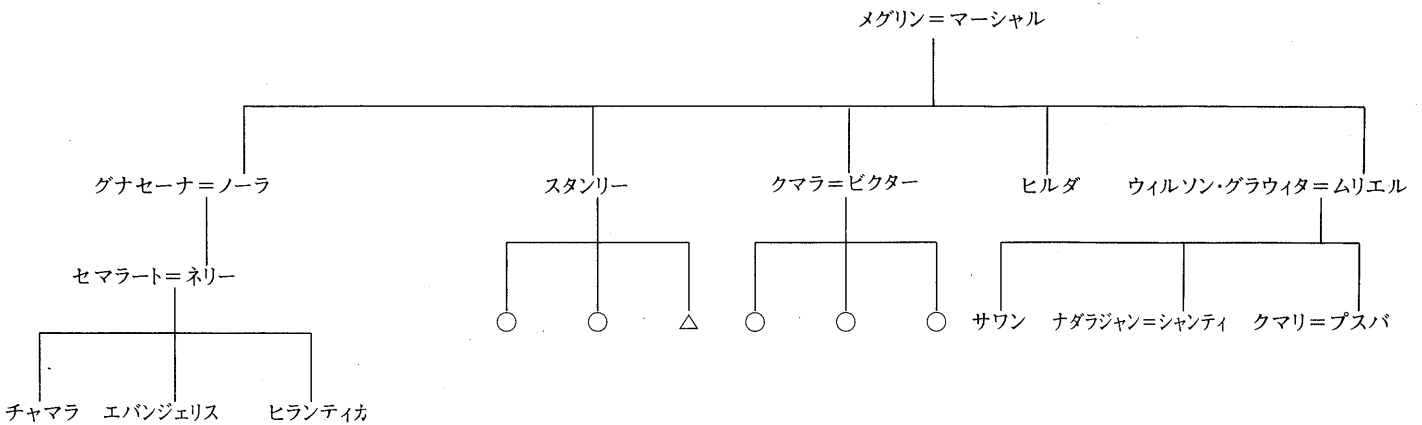
第一図


ビダーナ・ドゥラーゲ・ドミンゴ
シャドリス＝ジョシナ
アバランチョ＝ビダーネ
ペディリス
ジョン
デオドア
フレーザー＝マーシャル
フレデリク
ババン＝ジョシノナ
アンドルー
アニー
メアリー
カトリーン
アイドリス
アレリス
ピコリス
マーティン
ババーネ＝ピーロ
サンド＝ドーチョ
サウディナ＝サミッチイ
バビヤ＝シート
バランチ＝ミガンチョ
ババンチ＝レンチナ

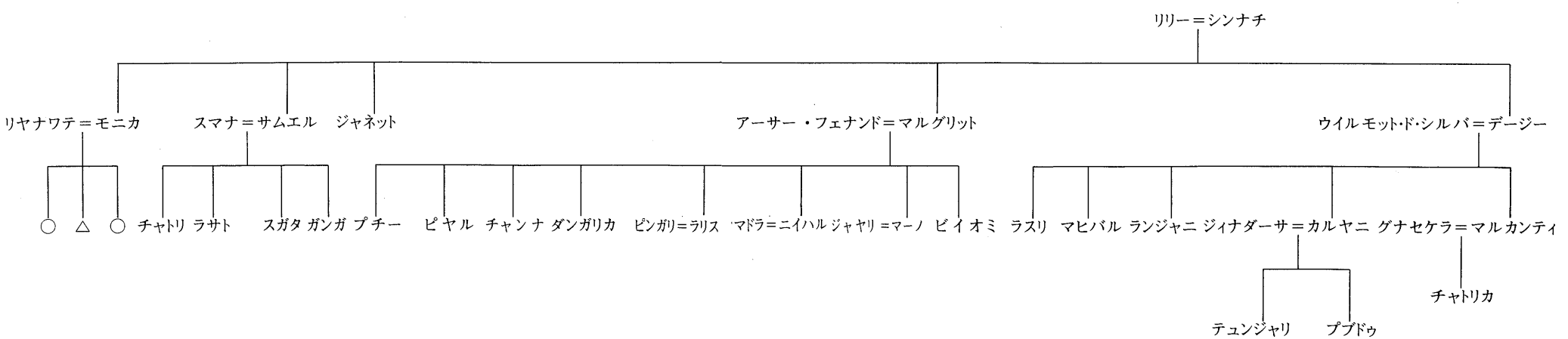
第二図


サウディナ＝サミッチイ・フェナンド
アランガ
メアリー＝パリス
アリス＝ディビット
リリー＝シンナチ
メグリン＝マーシャル

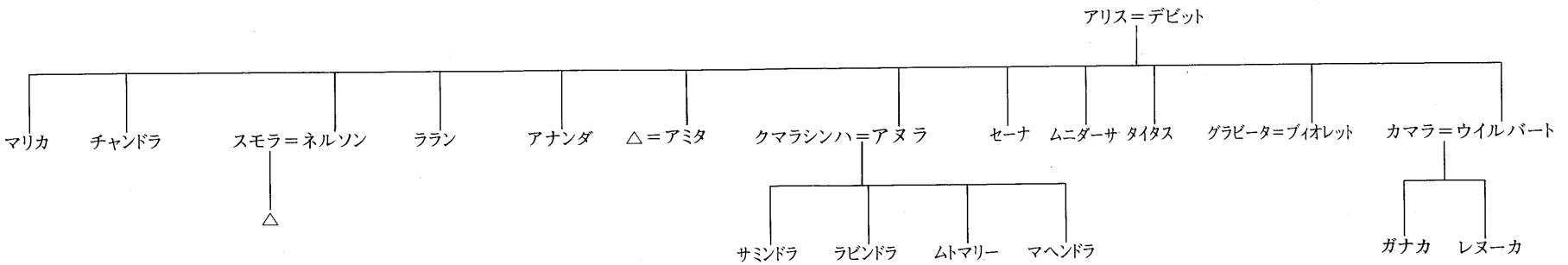
第三図


メグリン＝マーシャル
グナセーナ＝ノーラ
スタンリー
クマラ＝ビクター
ヒルダ
ウィルソン・グラウィタ＝ムリエル
セマラート＝ネリー
サワン
ナダラジャン＝シャンティ
クマリ＝プスバ
チャマラ
エバンジェリス
ヒランティカ

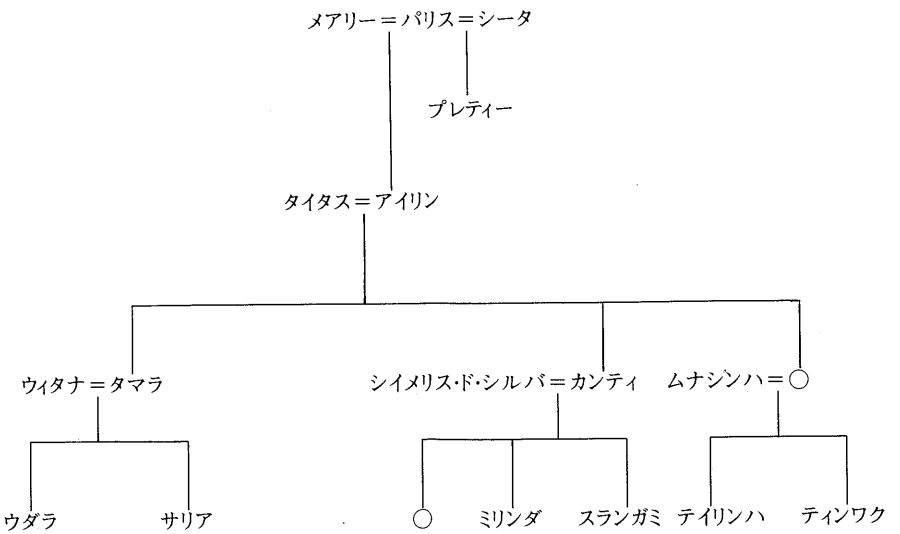
第四図


リリー＝シンナチ
リヤナワテ＝モニカ
スマナ＝サムエル
ジャネット
アーサー・フェナンド＝マルグリット
ウイルモット・ド・シルバ＝デージー
チャトリ
ラサト
スガタ
ガンガ
プチー
ピヤル
チャンナ
ダンガリカ
ピンガリ＝ラリス
マドラ＝ニイハル
ジャヤリ＝マーノ
ビイオミ
ラスリ
マヒバル
ランジャニ
ジィナダーサ＝カルヤニ
グナセケラ＝マルカンティ
チャトリカ
テュンジャリ
プブドゥ

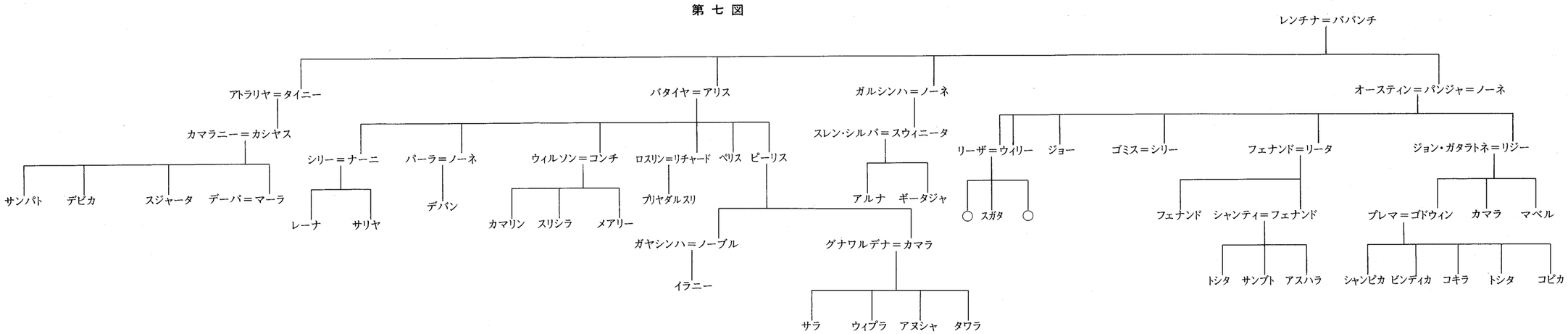
第五図


アリス＝デビット
マリカ
チャンドラ
スモラ＝ネルソン
△
ララン
アナンダ
△＝アミタ
クマラシンハ＝アヌラ
サミンドラ
ラビンドラ
ムトマリー
マヘンドラ
セーナ
ムニダーサ
タイタス
グラビータ＝ヴィオレット
カマラ＝ウイルバート
ガナカ
レヌーカ

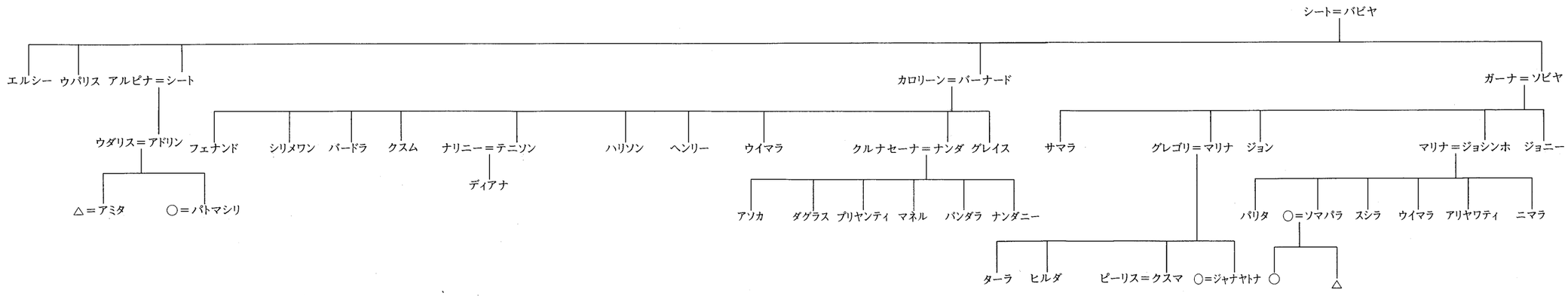
第六図


メアリー＝パリス＝シータ
プレティー
タイタス＝アイリン
ウィタナ＝タマラ
シイメリス・ド・シルバ＝カンティ
ムナシンハ＝○
ウダラ
サリア
○
ミリンダ
スランガミ
テイリンハ
ティンワク

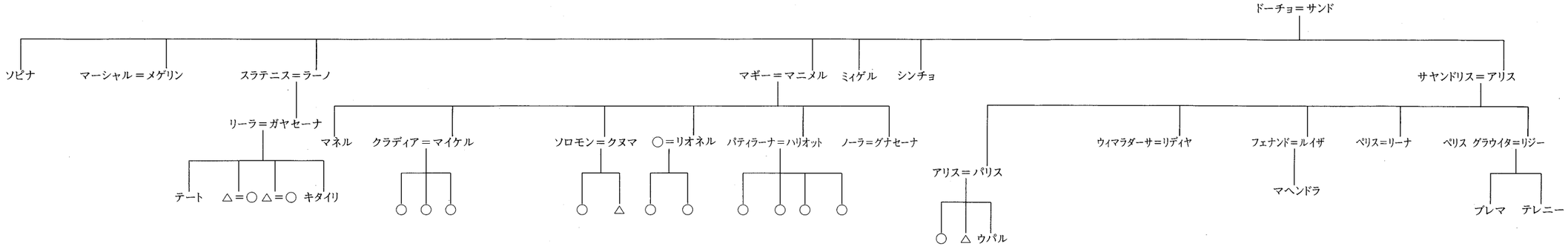
第七図


レンチナ＝ババンチ
アトラリヤ＝タイニー
カマラニー＝カシヤス
サンパト
デビカ
スジャータ
デーバ＝マーラ
バタイヤ＝アリス
シリー＝ナーニ
レーナ
サリヤ
パーラ＝ノーネ
デバン
ウィルソン＝コンチ
カマリン
スリシラ
メアリー
ロスリン＝リチャード
プリヤダルスリ
ペリス
ピーリス
ガヤシンハ＝ノーブル
イラニー
グナワルデナ＝カマラ
サラ
ウィプラ
アヌシャ
タワラ
ガルシンハ＝ノーネ
スレン・シルバ＝スウィニータ
アルナ
ギータジャ
オースティン＝パンジャ＝ノーネ
リーザ＝ウィリー
スガタ
ジョー
ゴミス＝シリー
フェナンド＝リータ
フェナンド
シャンティ＝フェナンド
トシタ
サンプト
アスハラ
ジョン・ガタラトネ＝リジー
プレマ＝ゴドウィン
シャンピカ
ビンディカ
コキラ
カマラ
トシタ
マベル
コピカ

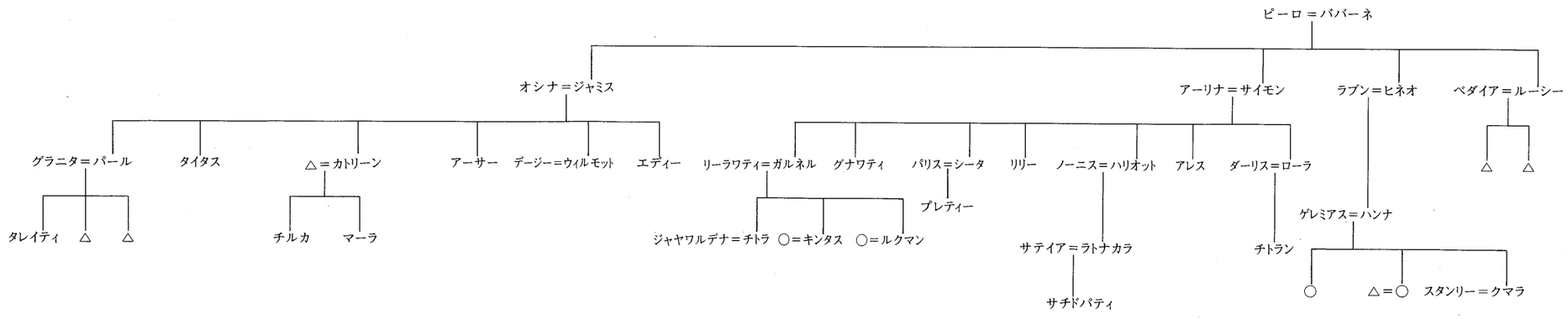
第八図


シート＝バビヤ
エルシー
ウパリス
アルビナ＝シート
ウダリス＝アドリン
△＝アミタ
○＝パトマシリ
カロリーン＝バーナード
フェナンド
シリメワン
バードラ
クスム
ナリニー＝テニソン
ディアナ
ハリソン
ヘンリー
ウイマラ
クルナセーナ＝ナンダ
アソカ
ダグラス
プリヤンティ
マネル
パンダラ
ナンダニー
グレイス
ガーナ＝ソビヤ
サマラ
グレゴリ＝マリナ
ターラ
ヒルダ
ピーリス＝クスマ
○＝ジャナヤトナ
○
△
ジョン
マリナ＝ジョシンホ
パリタ
○＝ソマパラ
スシラ
ウイマラ
アリヤワティ
ニマラ
ジョニー

第九図


ドーチョ＝サンド
ソピナ
マーシャル＝メゲリン
スラテニス＝ラーノ
マギー＝マニメル
ミィゲル
シンチョ
サヤンドリス＝アリス
リーラ＝ガヤセーナ
マネル
クラディア＝マイケル
ソロモン＝クヌマ
○＝リオネル
パティラーナ＝ハリオット
ノーラ＝グナセーナ
ウィマラダーサ＝リディヤ
フェナンド＝ルイザ
ペリス＝リーナ
ペリス
グラウイタ＝リジー
アリス＝パリス
マヘンドラ
テート
△＝○
△＝○
キタイリ
ブレマ
テレニー
ウパル

第十図


ピーロ＝パバーネ
オシナ＝ジャミス
アーリナ＝サイモン
ラブン＝ヒネオ
ペダイア＝ルーシー
グラニタ＝パール
タイタス
△＝カトリーン
アーサー
デージー＝ウィルモット
エディー
リーラワティ＝ガルネル
グナワティ
パリス＝シータ
リリー
ノーニス＝ハリオット
アレス
ダーリス＝ローラ
プレティー
ゲレミアス＝ハンナ
タレイティ
チルカ
マーラ
ジャヤワルデナ＝チトラ
○＝キンタス
○＝ルクマン
サテイア＝ラトナカラ
チトラン
サチドパティ
△＝○
スタンリー＝クマラ